LUNATIC ASYLUM
DYNAMIC SUMMER
JH5KDX

ＳＭにストーリーを求める者は糾弾されるべし。

ＳＭに意味を求める者は殴打されるべし。

ＳＭに教訓を求める者は断罪されるべし。

人は（男も女も）ＳＭのみにて生きるにあらず。

CONTENTS

P　5　偽善者はおしおきよ！
　　セーラー戦士はごきげんナナメ　by "T" factory

P20　SAILOR　SUN　by "T" factory

P32　進悟　十番勝負！　by 喪火姦憎

P53　亜美ちゃん大爆走　by Dr MORO

P58　長いナイフの月の夜　by 鶴巻 和哉

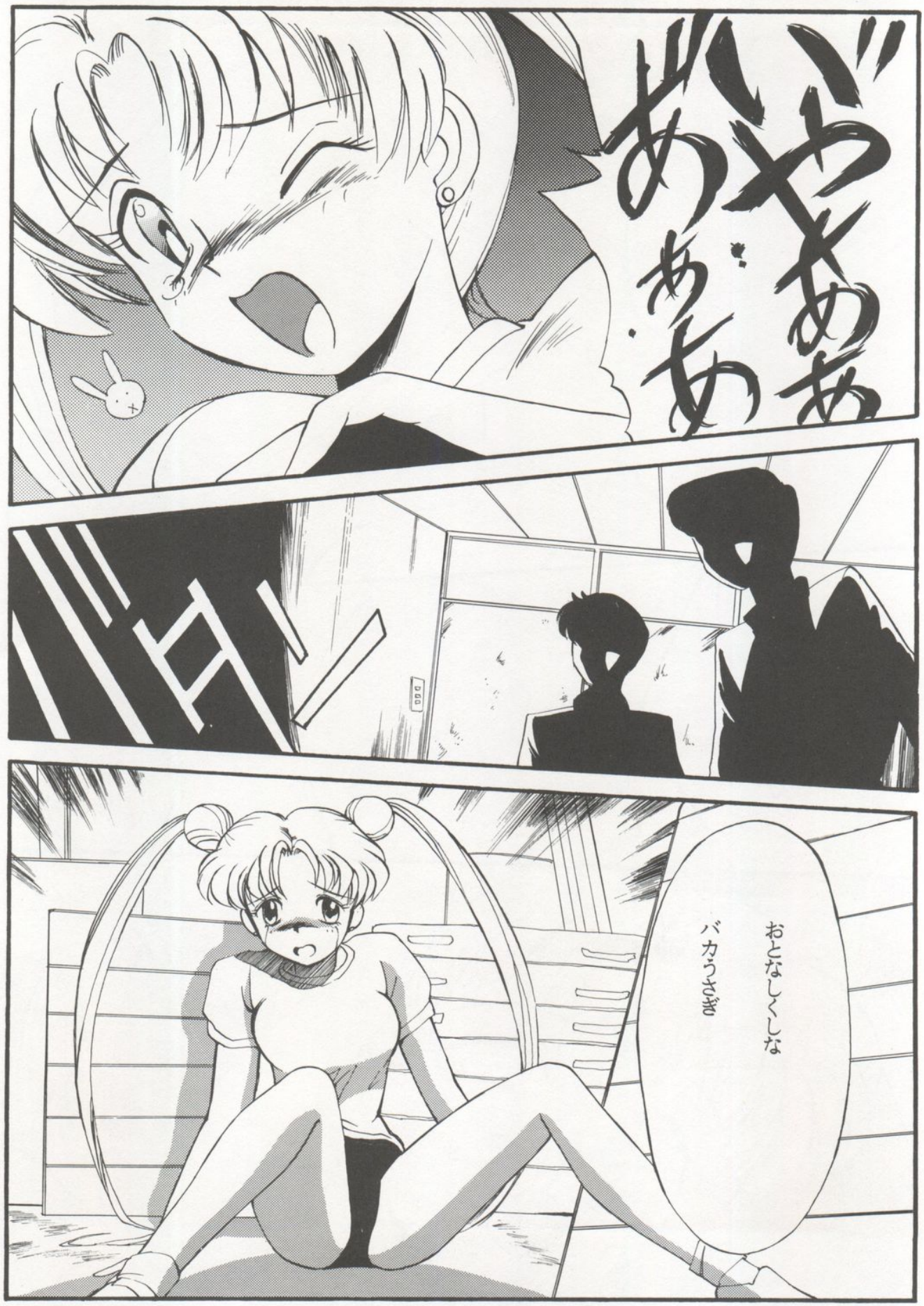
P61　SOLD　OUT　by franken・N

ゲストイラストなど　P－24・29　赤城 樹郎　P－85　土佐日記
　　P－18・30　ホヨヨ

表紙・中表紙 ―――――― by franken・N

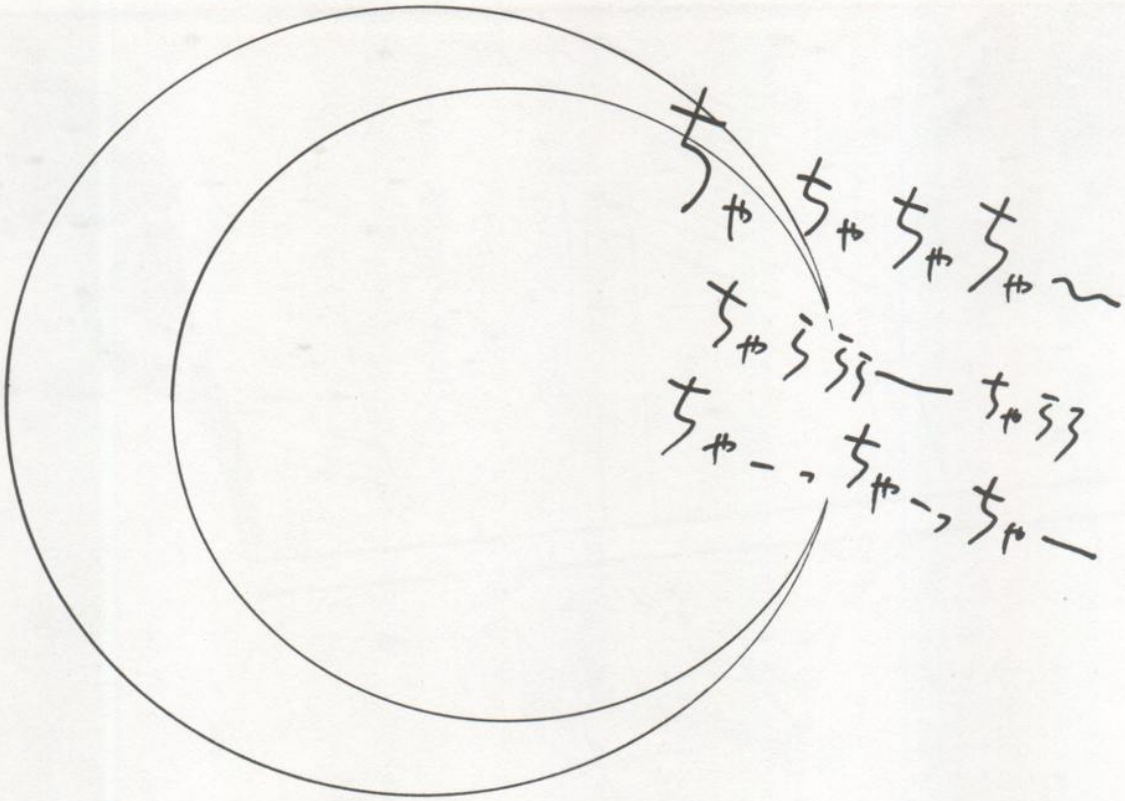
裏表紙・その他のイラストなど ―――― by "T" factory

この同人誌は１８歳未満の方へ頒布しておりません。
また書店での頒布委託も行っておりません。


いやあああ
おとなしくしな
バカうさぎ

あぁっ
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ

うさぎちゃんが
死にました。
体育倉庫の中で
マットに逆さに
くるまれて
死んだのです。
うわさでは
いた○らされた形跡が
あったということです。



美少女戦士

セーラームーン

偽善者はおしおきよ！

セーラー戦士はごきげんナナメ の巻

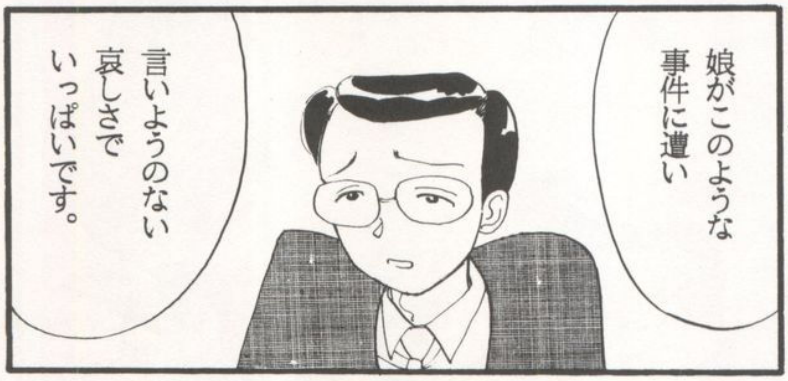
by "イ" factory

ねえ、
私たちどうするのこれから……。
プリンセスのうさぎはいなくなったのよ。守るもののない戦士なんておかしいわ。
何いってるのレイちゃん
うさぎちゃんがいなくてもエイリアンだか妖魔だかが人間のエナジーを狙ってるのよ。戦わなきゃ。

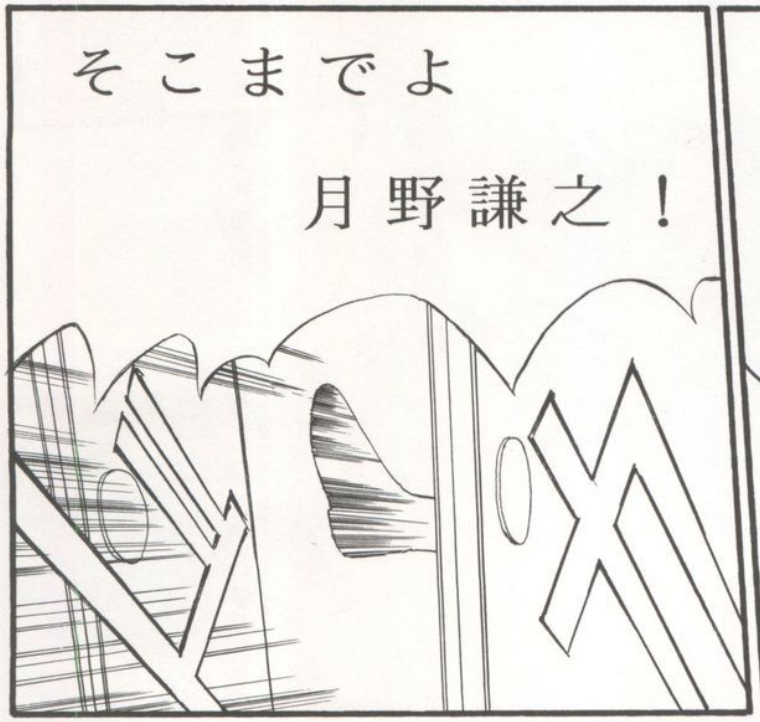
……
それより、
復讐するのよ！
うさぎちゃんを殺した連中を見つけ出して始末しましょう。
……
賛成ね。
賛成。
賛成。
みんな待って！
亜美ちゃん。

私たちは
その前に
倒さなきゃいけない
敵がいるのよ！

ばしゃ ばしゃ


娘がこのような
事件に遭い
言いようのない
哀しさで
いっぱいです。

いじめた子供たちにも
将来がありますので……
彼らの罪を問うので
なく
いじめを生み出す
社会的な構造をこそ……
ばしゃ
ばしゃ

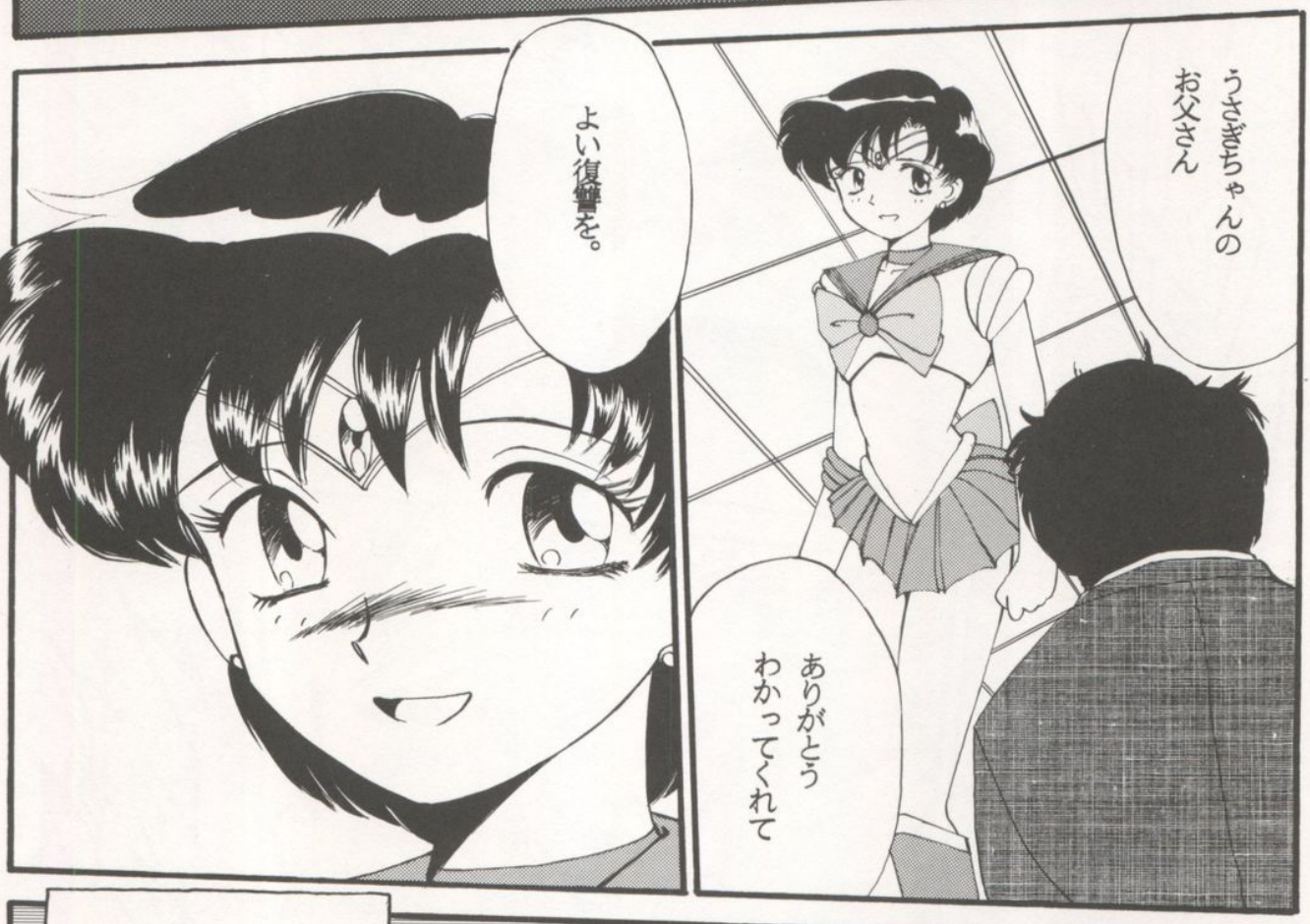

そこまでよ
月野謙之！

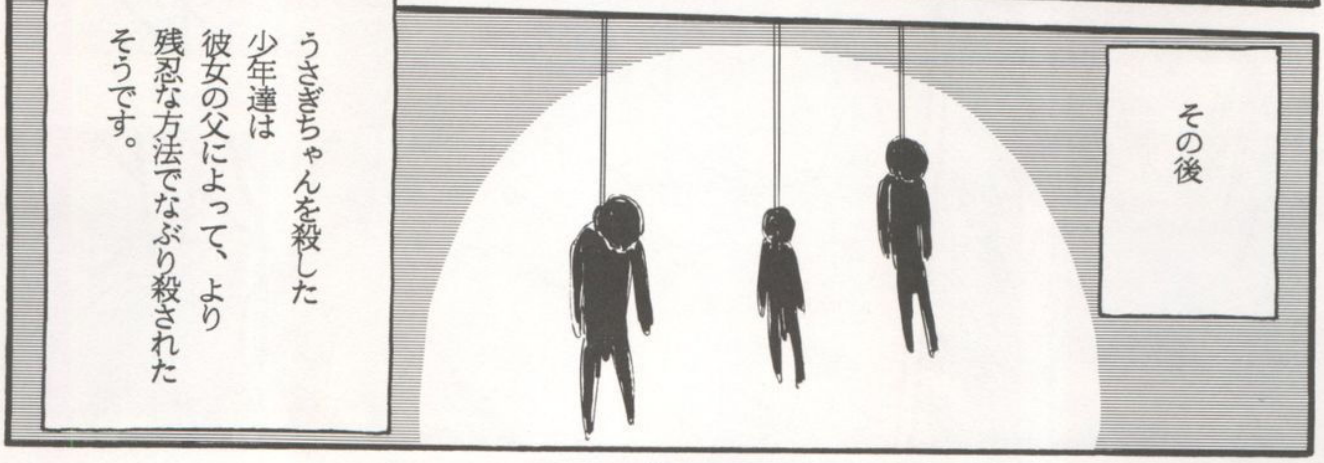
子供が殺されたっていうのに
TVの前では模範的演技をするバカ親ども
それじゃあいじめ殺された子供はうかばれない
法律は認めなくても親には復讐の権利があるはずよ。
セーラームーンにかわって
お仕置きよおっ！

この不感症ヤロー
ドッカーン
HARD
ドッカーン
BRAST

ブロロロロ
ギュロロロロ
ズミミミミ
ズミミミミ
拡散ビーム
ビビビビビ
ばばばばば
えーっしゅ

セーラー戦士達
ぶす
ぶす
私は間違っていたようだ。


うさぎちゃんのお父さん
ありがとうわかってくれて
よい復讐を。


その後
うさぎちゃんを殺した少年達は彼女の父によって、より残忍な方法でなぶり殺されたそうです。

P.S
うさぎちゃんは
火葬にされる直前
銀水晶の不思議な力で
生き返りました。
ハッピーハッピー
よかったね。
いやはー
ごめんごめん

END

B4.H04040

前回の夏コミケが終ったある日のこと

このH君は上海修学旅行列車事故の生き残りだ。
友人の屍を越えて今、君は何をやっているんだ？友の分も精一杯生きんか～い。
H君談：「いやあ、クラスの人数がいきなり半分になったのにはさすがに驚きましたね。でも今となっては良い青春の１ページですよ。」

セーラーサン
最強戦士登場の巻
きゃあぁっ
マーキュリーちゃん！
そこまでよ
ダジャレ妖魔！
月は太陽の影
太陽は月の源
黒い太陽と
月影の運命は
同じ糸の上にある

SOLAR POWER
パワァ
MAKE UP!!
ずびびびびび
ああ
みんなっ あれは第六の戦士
セーラー サンよっ
ゲートル+運動靴

だから
月の王女を守るの！

私の生命の
ためにもねっ♡

私、日野モトコ
14才のちゅーに
魚座のA型

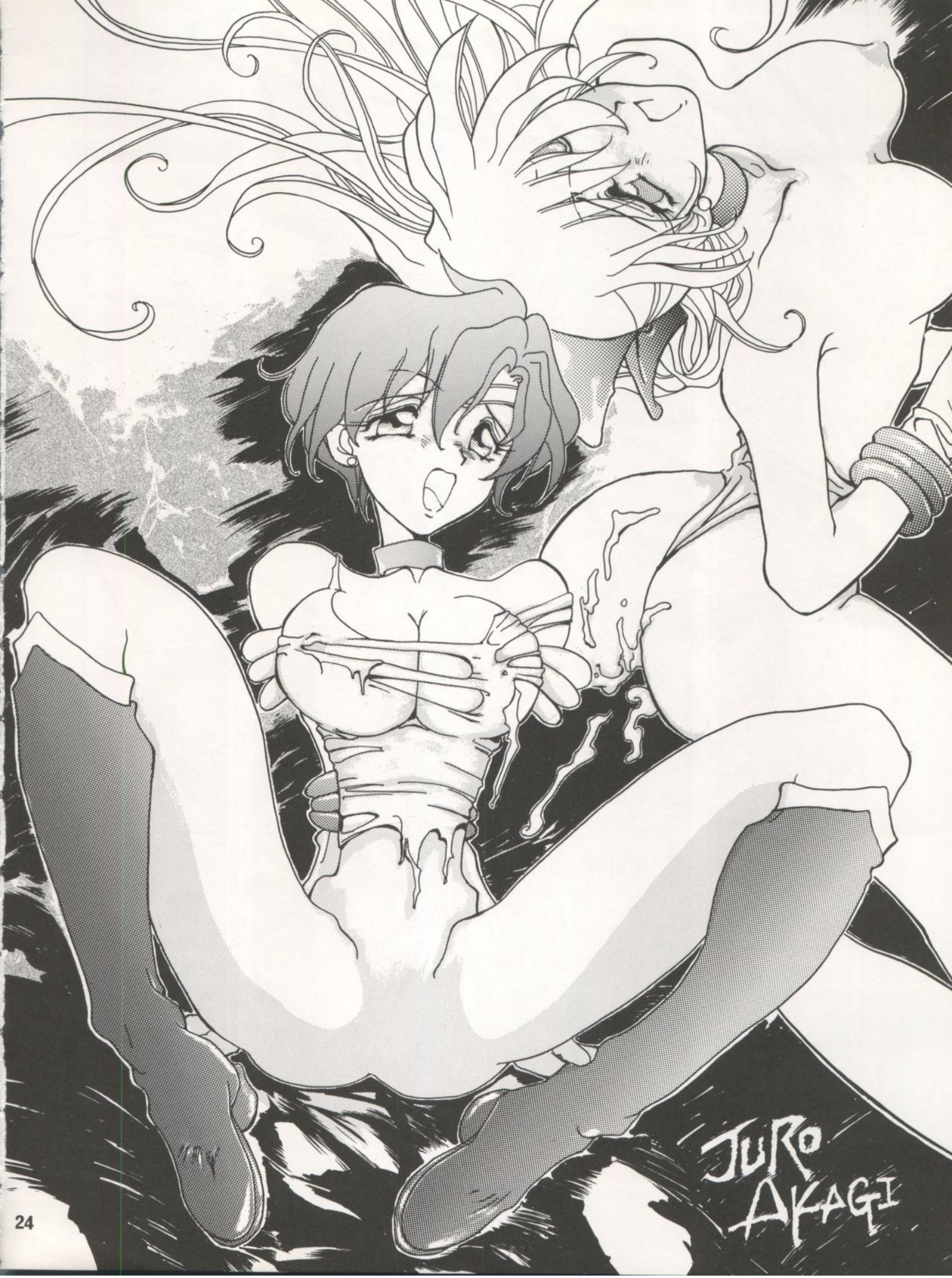
今、必殺
のお！

性格は明るくて、
沈着冷静頭もよくて、
男性にはつくすタイプなの。
でもちょっと右寄り。

ブローチ　ティフェレト君

NUCLEAR
SUNRISE!
SAILOR SUN
妖魔は倒れた。
だが、都市は壊滅し、セーラー戦士は不妊症になりました。
がんばれ セーラーサン とにかく がんばれ

おわり

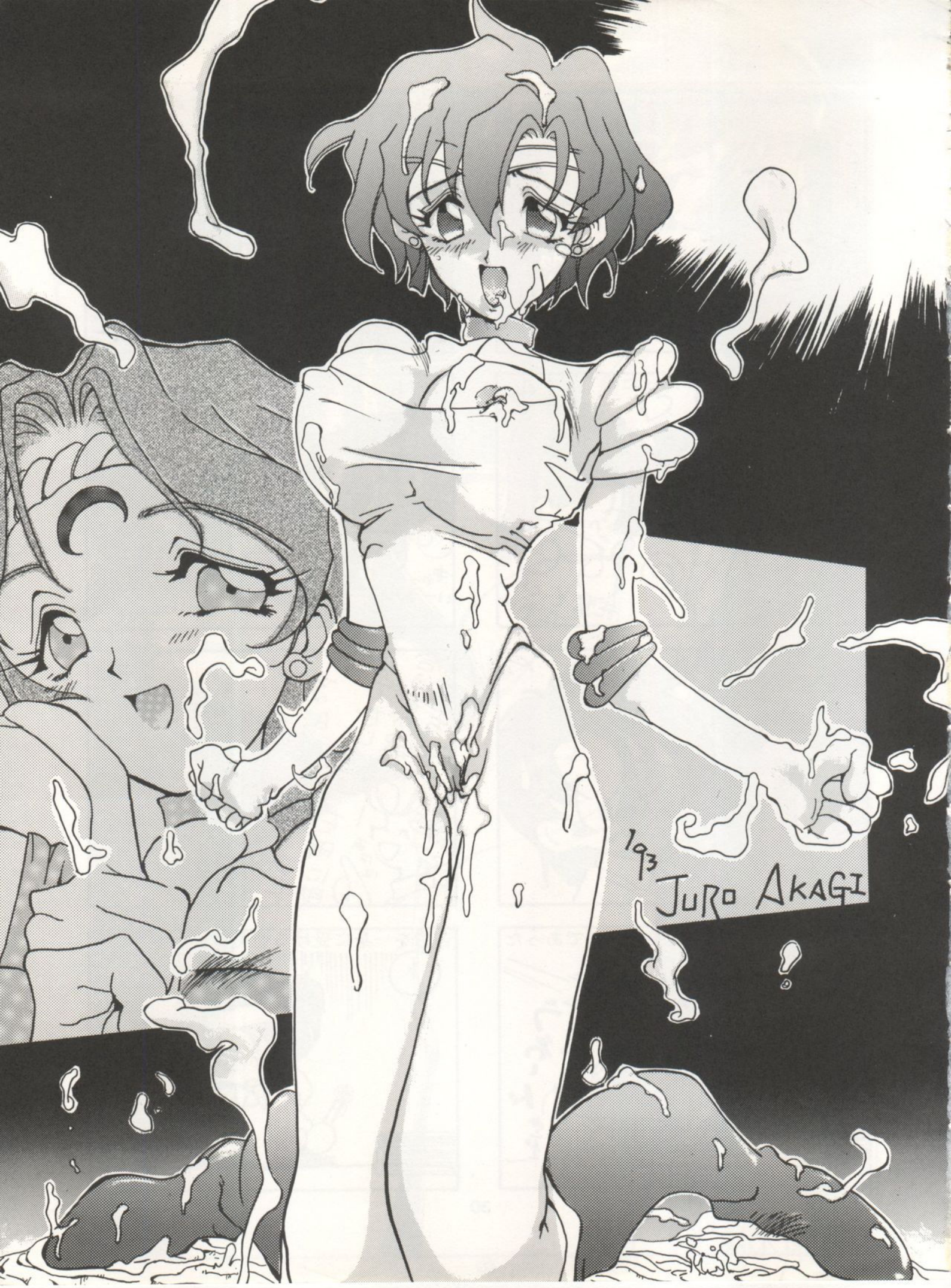

JURO
AKAGI

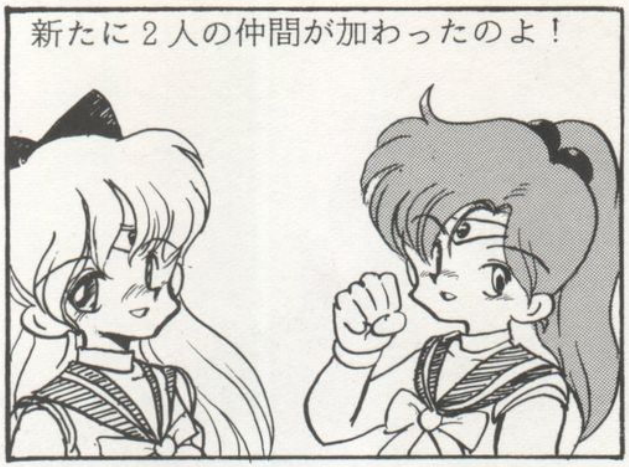
なんざますなんザマス、えっ、あのヴィーナスの登場の仕方は？その後の扱いは？もったいないねえ。セーラー戦士のなかで一番美味しいキャラなのに一番訳のわからないキャラになってしまってるじゃああありませんか。うきー。モキキー。怒りが声になりませんよ。ヴィーナスだけは原作の方が絶対良いわい。アニメはホント頭数あわせのようじゃありませんか。
プリンセスのダミーの件とか、セーラー戦士の先輩格としての描き方とか、もおっと良いやり方があったと思うのよ。そうすりゃラストの盛り上がり方も違ったというものよ。
ま、シリーズ・デレクターも幾原氏に変わるというし、今後に期待っス。ちゃんとヴィーナスをフォローせよ。視聴者は貪欲で高飛車で身勝手なのだ。

ウーン
ボイン
ボイーン
ホヨヨくん
よろこんでくれたかな？

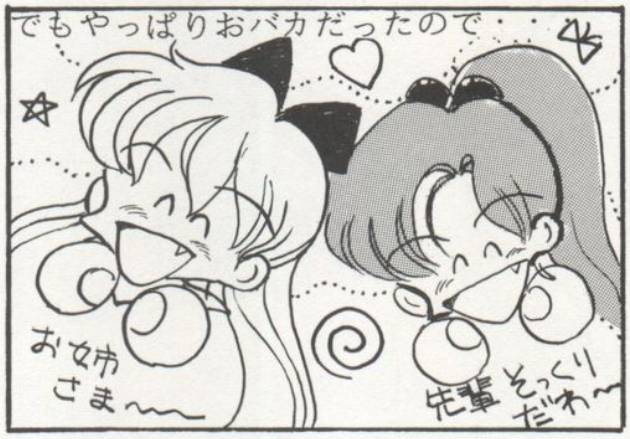
フリルマン

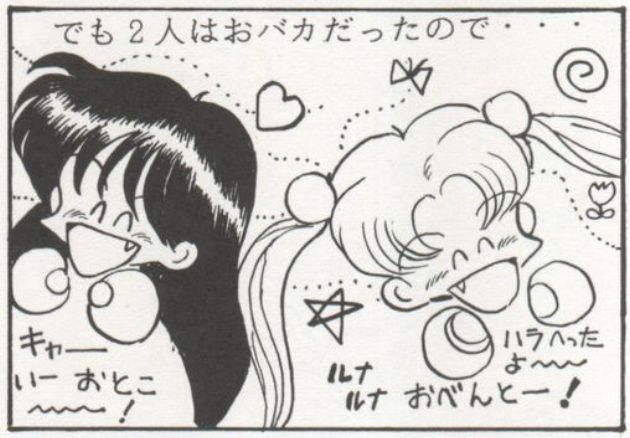
アルバイト
¥2000


1993 JURO AKAGI


新たに２人の仲間が加わったのよ！

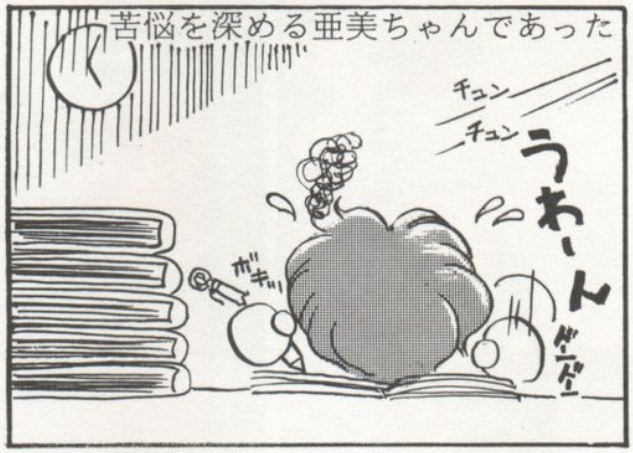
毎度おなじみセーラー戦士３人娘よ！
アタシが主人公なのに～
ハーイ！
ハーイ！


でもやっぱりおバカだったので・・・
お姉さま～～
先輩そっくりだわ～


でも２人はおバカだったので・・・
キャーいーおとこ～～～！
ルナルナ
ハラへったよ～～
おべんとー！

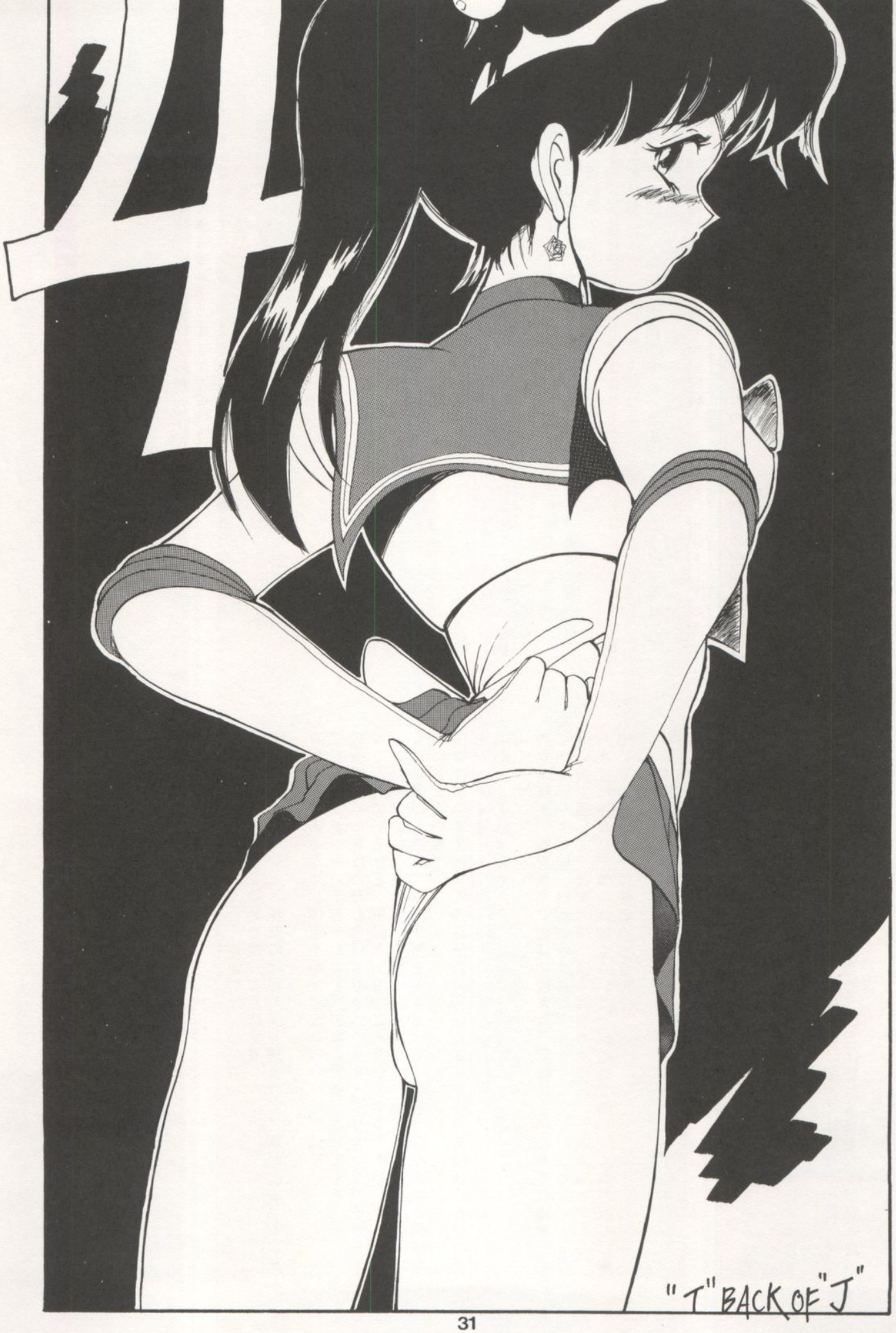
えー

えーっ
またー
だってー今日も戦いでやる時間ないしーあたしバカだしー困った時に助け合うのが仲間
亜美ちゃん
あはは


苦悩を深める亜美ちゃんであった
チュン
チュン
うわーん
ガギッ

苦労を一身に受ける亜美ちゃんであった
うう

B4.H04040


"T" BACK OF "J"

進吾 十番勝負 !

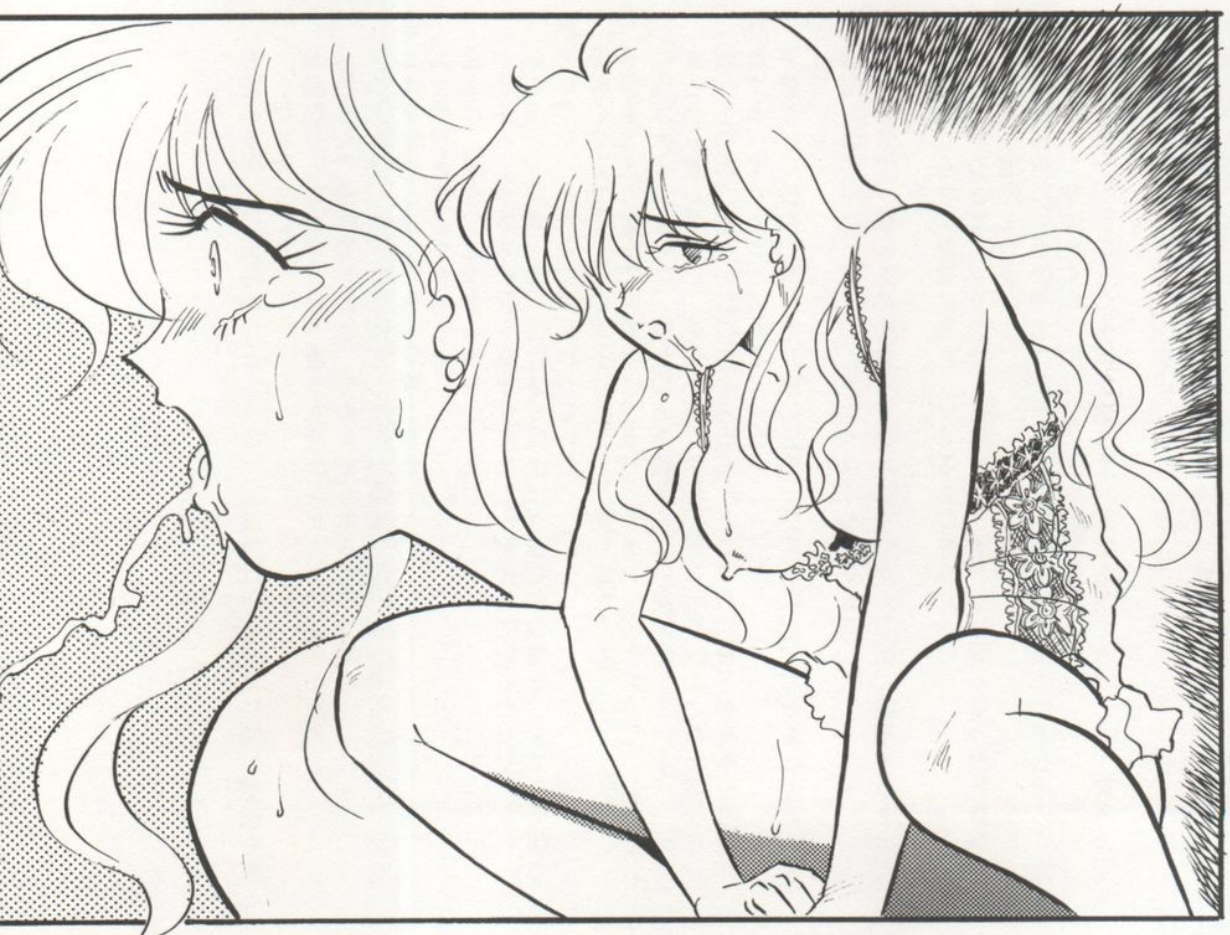
～プロローグ～

今、僕の下では、一人の女性が失神しているんだ。
それも、まだ僕と繋がったままだっていうのに。
だらしなくって、可愛いってのかな…、いつもは偉そうな事を言ってるくせに、そんなところがいいんだ。うん。
『おい春名、起きろよ！僕はまだ、いってないんだ』
『…は、んんっ。あっ、いやぁ』
二、三度突き上げながら、軽く頬を抓る。
僕の倍以上も歳をとってるとは、どうも思えない。
まったく、お姉ちゃんの回りには、普通の人はいないんだろうか。
『ご、ごめんなさいね、進吾君。あ、私ってば…』
いつもそうだけど、イッた後は力が抜けちゃったみたいで、気だるそうに上半身を起こしてしがみついてくる。
言っておくけど、僕のモノは春名の中いっぱいに埋まっているから、眉間に皺をよせて、苦しそうに目を閉じる。
征服感が、少しだけ満たされる。

そうそう、なぜ僕がこんな大人の領域に立ち入ったか、少し話しておく事にしよう。
僕のアレ、いま長さ22㎝もあるし、太さも並み外れている。
何時だったか、セーラー戦士の戦いを目撃した時に、偶然一筋のエネルギーが僕に命中したんだ。
翌日から、僕は自分が男として生まれてきて、どんなに良いかって事を知ったわけだ。
今じゃこの通り、なにしろ僕が欲しいと思ったら、どうにでもなってしまうんだ。
春名と、そう、最初にママで十分経験も積んだし、実験もしてみたからね。
今の処は満足してるけど、そのうちお姉ちゃんの友達の何人かとは、関係してみようと思ってるんだ。
まあ、ミカちゃんも、もう少し大きくなったら、試してみようとは思っているけど、今はまだ無理かな。
『ああっ、いっぱいで…』
春名の声で、僕は現実に引き戻される。

いくらアレが大きくても、まだ身体はそれ程じゃないから、大人の、ましてけっこうイイ身体の春名が、ぶら下がる格好で僕にしがみついてきたら、重くって大変だ。
両手をついても支えきれないで、結局覆い被さる格好になり、春名にリードされる様に、その胸に顔を埋めた。
僕のまわりじゃ、春名の胸は大きいほうだ。
思う存分しゃぶり、掴み、噛む。
『ああっ、いい…きついわ』
『今度は僕を、おいて行くなよ』
両手を回して、彼女の足を担ぐようにする
そうしておかないと、彼女の両足で胴を挟まれて、息が止まってしまう。
身体を預けるように、体重を乗せて彼女の中へ打ち込む。
ブチュ、ブチュという音をたてて、彼女の愛液が溢れてくる。
結構濃いめの彼女の草むらは、もうベッタリと張り着いて、チクチクしなくなっているけど、僕にとっちゃなんだかくすぐったい。
『いひっ、いひっ、』
たまに僕のものが、彼女の奥を突き上げて、春名は口の端から唾液をあふれさせ始める。
彼女は左手をまわして、自分のアナルをまさぐり、僕のほうもピッチがあがってくる。
『がっ…あはぁん』
『くっ』
彼女の指が、根元までアナルに埋まり、前の方も僕のものに跡がつくんじゃないかって程、締めつけてきた。
薄い壁を通して、彼女の指が僕の裏筋あたりに、刺激を与えてくる。
おまけに彼女は、僕の体重くらいじゃ跳ね返す勢いでくねりだし、声も泣いているみたいに変わってきた。
腰の辺りに、予感がしてくる。
続いて彼女も痙攣したようになってきて、僕もたまらず叫ぶ。
『いくよ、出すよ』
『来て！全部ちょうだい。いっぱい…』
電気が走ったみたいに、僕のアソコは繰り返し痙攣した。
春名も合わせるように、締めつけたり、吸い込むような動きをみせて僕のものを絞りあげる。
無言で口をパクパクさせていた彼女も、僕が体重を預けるとぐったり手足から力が抜けた。
激しく出したにもかかわらず、僕のものは萎えてはいなかった。
彼女もまだ、柔らかく締めつけて、二人は離れる事もなく、息が整ってくるのを待った。

僕は乳房を口に含み、両手でその感触を楽しむ。
彼女は大きく身体を入れ替えて、僕に馬乗りになる格好をとる。
もちろん、僕は乳房をくわえたままだし、彼女は僕に体重がかかってしまわないように、大きく足を開いて両肘を付けている。
春名はその体制のままで、腰だけを器用にくねらせて、僕を味わっているみたいだ。
しばらくするうちに、僕が注ぎ込んだ大量のモノが、彼女のモノと混じりあって、ジュル、ジュルと垂れてくる。
もちろん、新しく溢れてくるものもあるだろう。
抜けないように動いていた彼女を、一旦大きく持ち上げると、今日僕の最初のモノが、太股を伝って流れ出した。
『ねえ春名、もったいないよ。すくって飲んで』
甘えた声で、彼女にそう言うと、ためらう事なく手にとって、口に運んでいく。
ジュル、ビチャと、いかにも美味しそうに飲み込んでいく春名。
それを見ていると、僕もまた気分が乗ってくる。
肉の弾力と、量感のある春名の尻を掴みながら、今度は春名が何を期待しているか、すぐにわかってしまう。
『さ、向こうを向きなよ。準備は出来てるんだろ』
『ううん。分かってたのね』
ベッドの上に胡座をかいた僕は、背もたれに枕をあてがって、春名の体重がかかってきても大丈夫なように、身構えて待った。
彼女は後ろ向きに、僕の砲心を片手で導き、ゆっくり身体を落としてきた。
『うっ』
『うわっ…くっ』
僕の目の前で、彼女の後ろの門へとめり込む自分自身。
カリの部分さえ通過してしまえば、後はゆるゆると埋まっていく。
春名は僕に抱かれる日には、必ず後ろの準備をしてるんだ。
一度浣腸をして、中をきれいにしておく。
おまけに前でイッた後には、後ろもかなり楽に出来るようになっているんだ。
そんなわけで、大きいとはいっても、すっかり春名のなかに埋まってしまった僕自身は、強烈な締めつけと圧迫感で、たちまちいきそうになってしまう。
前に回した手は、彼女の胸をまさぐって、ピンピンに立った乳首をこねまわす。
彼女は片手を自分の中に突っ込み、もう片方の手は僕のナッツの部分をにぎにぎしてくれる。
きついから、そんなに激しく動くことは出来ないけれども、ベッドの



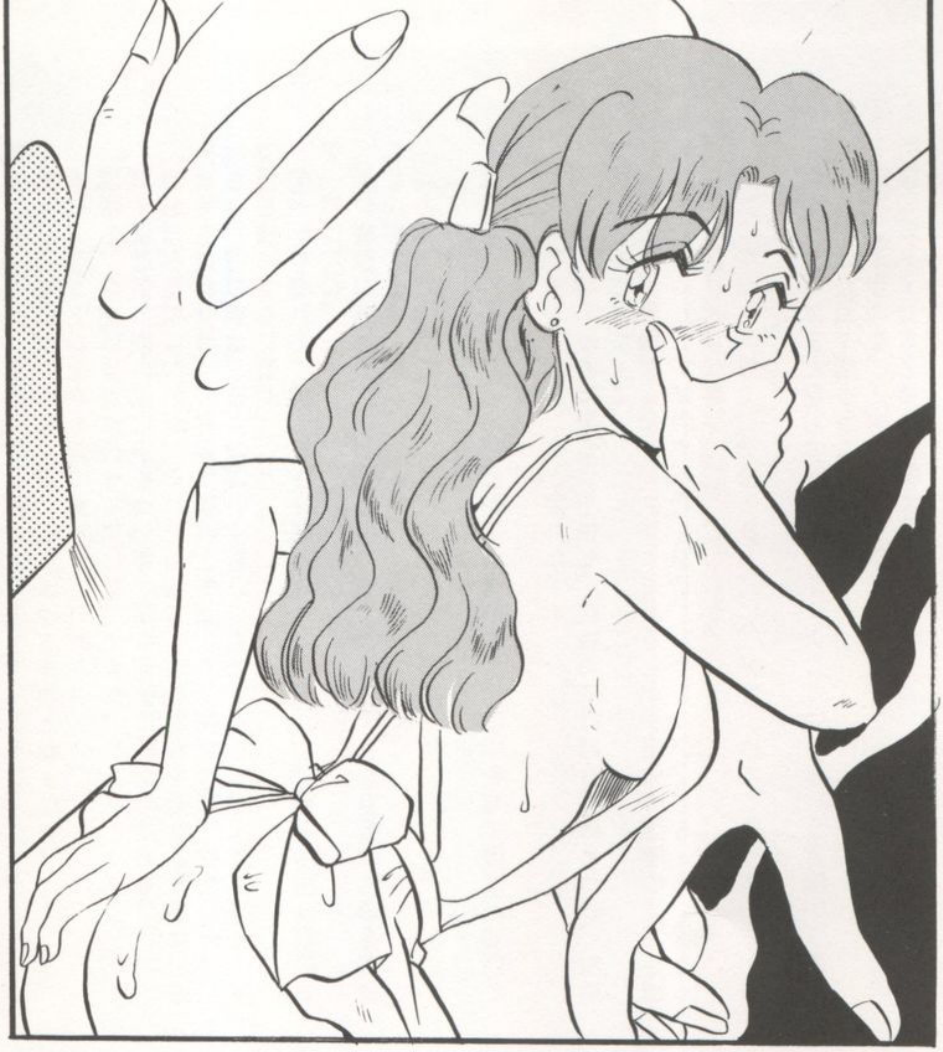
スプリングと弾力を利用して、僕は春名の直腸を抉る。
アナルってのは、内蔵を犯している感じがたまらない。
征服感という意味においては、最高に興奮する。
お互いにすっかり慣れているから、僕の動きに合わせて、春名の口からは、息が漏れる。
『ね、ねぇ。また、またいきそうになってきたわぁ』
彼女が呂律の回らないなりに、僕にねだる。
僕は、彼女の髪の毛のなかに顔を埋めたままで、応えの代わりにクリトリスをつねった。
『ひっ！』
ビクンと硬直した春名は、僕の手が濡れるほどの愛液を溢れさせ、軽く高みに駆け上った。
同時に来たすごい締めつけに、僕もたじたじだ。
さっき一度出してなかったら、とてももたなかったろう。
とにかく、彼女の身体にしがみついたまま、僕の身体も同じうねりに飲み込まれた。
『…うわぁああ』
すっかりだらしなくなった、彼女の口から唾液とともに、声が絞り出されているが、こっちもそろそろ限界だ。
背面座位から背後位崩れに移り、体重を気にせずに僕は動ける様になると、僕のピッチも上がってくる。
腰の部分だけ突き出した、まるで平泳ぎか何かのような格好で、春名は僕にアナルを指し貫かれている。
充血したアナルの回りは、うっすらとピンクに染まっているし、時折めくれ上がる粘膜も、きれいなピンク色をしている。
出入りしている僕自身も、同じように見える。
限界だ。
僕は彼女の尻を思い切り掴んだまま、深く最後の一突きを送り込み、欲望の媒体を思いのまま注ぎ込む。
ビューッ、ビューッと、何度にも分かれて腸内に。
『あ、熱い…』
彼女はそういって、涙をながす。
僕も満足して、キスで応えた。

やがてこの日の、一ラウンド目が終わって、僕たちは休憩に入る。
股間から名残りのものを流しながら、彼女は僕とバスルームへ。
この後幾度か、とにかく僕の気が済むまで、春名は奉仕を続ける事になるわけだ。
そしてその後は、なにくわぬ顔で、普段の生活に戻る。
僕はそうして、新たな獲物を捜しながらの日々を迎える。

日曜の朝、まだ五時前だというのに、進悟は下半身に独特の感触を感じて、目を覚ました。
薄明かりのなかで、はっきり女性がかがんでいるのが見える。
もちろん、母親でもあり、彼の女でもある育子である。
机の上には、エプロンに包んだ服が乗せられ、どうやら朝早く、父親をゴルフに送り出したらしい事がわかった。
『ママ、おはよう』
進悟は、髪をなでながら声をかけた。
どうやら、うさぎが目を覚ます前に、一戦望んでいるのだ。
なるほど、悪戯っぽい目付きで見上げた彼女の表情は、すでに母親の顔ではなく、一人の女に変わっていた。
進悟から見ても、母の育子は美人で可愛い女だった。
子供を二人も産んでいるのに、ボディラインは崩れていないし、たしかに胸は大きくないが、張りのある素晴らしい身体をしている。
まとわり着いていた、毛布を押しやり、髪の毛を掴んで引き寄せる。
彼のものが、暖かい口の中からぬるりとこぼれ、育子が身体を密着させたまま、ずり上がってくる。
下着だけの彼女の身体を、彼の元気一杯のものが、なぞるように突き上げていく。
進悟の口の中に、彼女の舌がすべりこんでくる。
さっきまで、彼のものを含んでいたにもかかわらず、嫌悪感はまったくない。
それどころか、急速に高まってくるものを感じる。
慣れた手つきで、ブラジャーを外すと、すっかり固くなった乳首が、彼の胸を心地好くつついた。
進悟は器用に、足の指でパンティーを引っかけるように下し始め、彼女も協力して身体をくねらす。
彼女の指が、彼のものを再び捕らえ、進悟も手を伸ばして、育子の秘部をさぐる。
すっかり熱く、濡れている。
けして濃くはないが、彼女の草むらも張りついていまう程の、大量の愛液が溢れていた。
うっ、と呻いて、口を放した彼女の身体が、ぶるっと震える。
『ねえ、大きな声を立てちゃいけないよ』
『うん、わかってるわ、進悟ちゃん』
彼女は春名と違って、経験豊富なだけに、反応の一つ一つが大きく、つい大声を立ててしまう事も多かった。
普段はいいのだが、今日の場合はまずい。

待ち切れなくなった彼女は、器用に手を添えて、先だけを潜り込ませる様にあてがった。
ゆっくり、味わうように埋めていく。
そして、埋められた体積と、同じかと思わせる程大量の愛液が、彼のものや彼女の太股を伝って、だらだらと溢れ出た。
ブチュ、ズブッと音をたてて、すっかり奥まで埋まりきると、きつい締めつけが、巧みに快感を送り込んでくる。
進悟は下から抱きしめ、乳房に跡が残るほど噛んだ。
『きゃっ』
一瞬、悲鳴をあげる育子。
彼女がこうした事で、簡単にイッてしまうのを知っている進悟の、悪戯ではあったが、どうやら今回は大丈夫だったようだ。
抱きしめていた力を抜くと、彼女はゆるゆると動きだす。
まだ、ベッドの軋みを気にする余裕がある。
進悟も、最初は彼女に任せる気になってきた。
育子は進悟の頭の側に手をついて、腰を前後に動かし始める。
春名ほど量感はないが、それでも悩ましげな動きを見せる乳房に、進悟は舌を這わせつつ、片手は腰の上を回して、彼女の裏門を捜した。
もう片方の手は、彼女の口の中をいじくりまわして、人差し指と中指で舌を挟んでもて遊ぶ。
すっかり濡れて、柔らかさを感じさせるアナルに、彼の中指は根元まで一気に沈む。
熱い腸壁の感触を、しばらく指の腹で楽しみ、また自分のものを薄壁ごしに感じる。
『ああっ、進悟ちゃん、まだ悪戯はしないでぇ』
『なんだって、よく聞こえないよ』
たまらず育子は声をあげたが、舌を挟まれ、口中をもて遊ばれていては、満足に声にならない。
大量の唾液が、だらだらと零れた。
一方で、腰の動きは激しさを増し、前後の穴は蠢き、締めつけ、快感の大きさを伝えてくる。
人間とは不思議なもので、タブーであるとか、自分の理解の範囲を越えたものに対して、嫌悪や反発を感じていたものが、ある一線を越えた途端に、より大きな喜びになってしまう。
彼女の場合も同様で、進悟よりも先に、昇りつめてしまう事の方が多かった。
だが、今日はまだ自分のペースでリードしているという意識が、高みに昇りかけた処で踏み留まらせるようだ。
彼女は下半身を、正座して腰を落とした格好から、足の裏をつけた、所謂和式トイレスタイルに変えてきた。

彼のものが、きゅっと、入口で締め上げられ、太股には尻の丸みが当たる。
不安定な格好だが、それまでついていた手を肩をつかむことで、なんとかうまく動けるようだ。
すでに彼女の息は荒くなってきて、ベッドの軋みも大きくなり、てらてらと濡れて光っている彼自身の、毛の生えてない根元のあたりに、愛液が泡をつくっていた。
ブチュ、ブチュッと、音も激しくなり、進悟も彼女のアナルに埋めた指を、抉り、激しく抜き差しした。
舌をもてあそばれているせいか、ボタッ、ボタッと大量の唾液が、彼の胸や顔を濡らす。
『はぁあん……いひっ、ぅわぁああ』
声にならない。
育子はこの格好で、子宮を突き上げられるのに弱い。
おそらく、夫婦生活ではそうなかったのだろう。
あるいは、夫のサイズ自体も、さほどではなかったに違いない。
経験豊富ではあるから、膣感覚も十分だが、きつい通路といい、まったくの処女地だったアナルといい、たいした性生活ではなかったのだろう。
なにしろ、進悟が母親である育子の性を、開拓していったようなものなのである。
『ママ、まだ早いよ。我慢して』
『うわぁ、えうっ』
肩を掴んだ彼女の手に、ぎゅっと力が入り、腰の動きが少しセーブされた。
見上げると、両目にいっぱいの涙を溜めて、女の、あるいは母の顔でやさしく微笑み返す。
いとおしさが募って、進悟は抱きしめるかわりに、大きく深く、ゆっくりと突き上げた。
同時に、彼女の方も合わせるように、ぐっと身体を沈めてくる。
『ぅわぁあっ、ひやぁ』
ついに呂律がまわらなくなってきて、規則的なピッチで腰が上下しはじめた。
『い、今だ。いくよ、ママ』
『来て、来てっ、あ、ひーっ』
予め、口中に手を入れていたが、ドキッとする程の声をあげ、育子が高みに昇りつめた。
きゅううと、強烈な絞め込みがきて、子宮がぐっと下がってきた。
進悟はめいっぱい奥へ突き入れて、思い切り己の白濁液を注ぎ込む。
彼女も痙攣を繰り返し、彼自身ばかりかアナルに潜り込んだ指も、痛



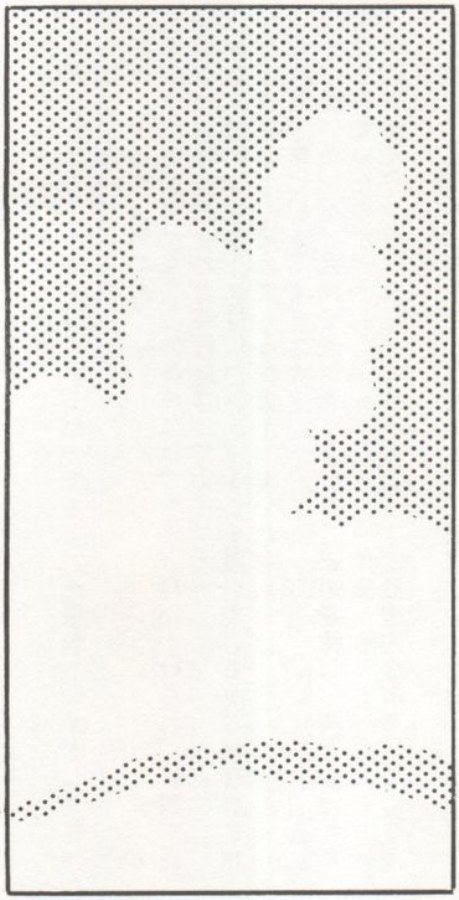
い程絞めつけてくる。
何度も背中を走る感触に、ブリッジのように身体をしならせて、長く大量に出し続けた。
彼女の肩を掴んだ手が、強弱を繰り返して、やがてぐったりと彼に体重をあずけてくる。
唇を求めてきた育子と、心地好いキスをかわす。
春名とはやはり違い、母親という事を抜きにしても、初めての相手でもあり、進悟も彼女にだけは無防備に身体をあずける。
やがて朝早くから、大量の放出をしたせいか、進悟は眠気に引き込まれていく。
再び目覚めた時、すっかり後始末は終え、普段どうりの母親に戻った彼女がいた。

『へぇ、じゃあこれから出かけるんだね、お姉ちゃん』
『そーなの、すっかり寝坊しちゃったよーん。うえぇ』
『まったく。目覚時計ってのは、何のためにあるのかしらねぇ』
『そんなの、今言っても始まんないでしょ！あ、お弁当も、お願いしまーっす、お母さまぁん』
本当に姉ながら、情けないと思う。
これでは普段の朝と、なんら変わりがない。
ともかく、姉のうさぎは友人のなるちゃん達と、どうやら課外学習関係での外出らしい。
メンバーは、おそらくクラスの友人達、彼の頭の中で、ターゲットとしてピックアップしている、数人の顔が浮かぶ。
彼も今日は外出するつもりだった。
まあ、家は育子一人になるのだから、たっぷりとする事も出来るのだが、次の獲物の物色というか下調べにも行きたい。
水野亜美、彼女はどうやら浦和なる彼がいるらしいから、計画的なアプローチが必要だ。
当面、彼が狙っているのは、マコちゃんこと木野まことである。
姉のうさぎが、自分の事を棚に上げて、ホレっぽいというくらいだから、付け入るスキやなんかも十分のはずだ。
そんな事を考えて、遅い朝食を終えていた。

外はもう、かなりの暑さであった。
電柱の影も、真下に申しわけ程度に見えるだけだ。
アスファルトの照り返しも、急にきつくなって来たようで、ぶらぶらしているのも辛くなってくる。
木野まことが、一人暮しをしてると聞いていたので、家の回りをそれとなく探ってみたり、計画を練ってみたり、そうして二時間近くも過ぎ

たのであった。
さすがにたまりかね、コンビニでアイスを買って、一息ついた時だった。
『あら、たしか進悟君……よね』
『ああ、うさぎちゃんの弟の…』
『お姉ちゃん達、まこさんと、ええと…』
『愛野美奈子よ、進悟君』
偶然にしても、いいタイミングだった。
金髪かと思う程、薄い栗毛の美少女は、ピンクのミニスカートと白のタンクトップで、進悟の目には、そのボリュームのある胸の膨らみが、はっきり波打っているのがわかった。
もう一人、まことの方は厚手のTシャツに、デニムのパンツだが、なぜか普段とは違った感じがする。
また、二人を見比べると、美奈子からも、何だかわからない妙な雰囲気を感じるようでもある。
しかし進悟には、特にヤバい感じには思えなかったので、適当に相手をして切り上げるつもりになった。
『へぇ、図書館にいってたの』
アリバイ工作ではないが、答えも小道具も用意されている。
もし、この後の事を聞かれても、プールに行く事になっているし、水着の用意も怠りない。
まあ、普通子供の言うことを、一々疑ってかかる者は少ない。
あっさり、彼の筋書き通りの展開である。
今日はきっかけが作れただけ、成功としておこう。
そう思って、別れるだろう挨拶を予想していた進悟には、思いがけない美奈子の声であった。
『そう、うさぎちゃんはお出かけ。ねえ、ところで進悟君て、暇？』
『ちょっと、まさか……』
明らかにまことは動揺を見せた。
主導権は美奈子が握っていて、まことは反論しようとしたが、何も言わないで引き下がった。
『ねぇ、お姉さん達と、少し遊んでかない』
『いいけど、何か冷たいものがなくちゃやだよ』
『もちろん、じゃ、決まりね』
その時、進悟は美奈子の笑い顔の中に、明らかに何かを見出した。
子供らしい答えに満足し、その本質を見せてしまったのだが、もちろん彼は、子供であって子供ではない。
性の魔力を、取り込んで自分の物にしてしまった、恐るべき、いや、愛すべき存在なのだ。

ますます彼の望む展開が開けていく。
入道雲が、東の空を見る見る覆っていた。
進悟が連れてこられたのは、やはりまことの部屋だった。
わりと殺風景で、女の子女の子してない部屋だが、窓から見える高台の緑が、一服の清涼感をもたらしていた。
エアコンはもちろん効いているのだが、彼らは皆、うっすら汗を滲ませていた。
ガラステーブルの上には、飲みかけのグレープフルーツジュース。
そして、テーブルの向こうには、あきらかに彼を挑発する目的で、二人の美少女が足を開いて腰を下していた。
もちろん、パンティーが進悟の目に見えるのを計算して、足を組み替えたりもする。
とはいえ、積極的なのはやはり美奈子で、まことはと言うと、逆らいこそしないものの、落ち着かない様子だ。
ガラステーブルごしの、美少女の下着と足の競演か。
進悟はそんな事を思いながら、表向きは定石通りのモジモジ君を演じていた。
確かに、春名や母に比べると、大人の目には子供に映るかもしれない年齢の、微妙な思春期の少女達だ。
ところが進悟の目には、彼女達も十分立派な大人に映る。
姉のうさぎからは、今だ色気など感じもしないが、目の前の二人からは彼に向かって放射されている、オーラのような色気、あるいはメスの発するフェロモンが、間違いなく感じられた。



今の処、会話もたいした内容ではなかった。
二人が何処まで、いけないお姉さんごっこを続けるのか。
とにかく、姉の友人達であるから、こちらから早急にしかけてはならない。
とことん成り行きに任せる、そう腹を括って、進悟はわざと下品な音を立ててジュースを飲んだ。
美奈子はその様子に、すっかり満足して、ますます大胆にしゃがんで胸の谷間を覗かせたりする。
彼としては、演技しながらしっかり品定めするだけだ。
狙いはまことだったが、美奈子の素晴らしい身体も、いずれは手に入れたいものだ…などと、余裕も出てくる。
『あらあら、進悟君てば、すっかり汗びっしょりじゃない』
『そ、そうかな』
『そうだ、マコ、シャワー貸してあげなさいよ』
『う、うん』
『い、いいよ。どうせプールに行くつもりだったんだから』
とりあえず、美奈子の予定通りの展開で、予定通りの答えが出たはずだった。
『じゃあ、プールに行くかわりに、お姉さん達と一緒に、シャワーで遊んでいこうよ、ね』
強引だが、もちろん彼が逆らえるはずのない展開だ。

へぇ……、進悟は驚いた。
所謂普通のマンションの、ユニットバスじゃあない。
かなりの広さで、以前家族で泊まったディズニーランド近くの、ホテルの浴室くらいの面積であった。
浴槽は大人一人なら、中に寝てしまえるほどの、深さも広さもある。
洗面台こそ小さいが、便器も奇麗な陶器のもので、よく見るとコーディネイトされた高級ユニットバスではなかろうか。
乾燥機と洗濯機の前では、三人が服を脱ぐには少し窮屈だ。
進悟は急かされるまで、ズボンには手をかけない。
一方美奈子は、ここでも真っ先に全裸になった。
下着もシルクの上等なもので、なんだかすごい。
肌の白さは格別で、吸いつきそうな感触。
胸は大きく、バイズリってやつも十分可能だろう、などと進悟は思う程で、上品ないい形である。
腰は薄めだが、外人のようにヒップはクイッと上がっていて、栗毛の逆三角の薄い草むらは小さい。
ごくり、と生唾飲み込んで、一方のまことはと言うと、なんと服を脱ごうとしない。

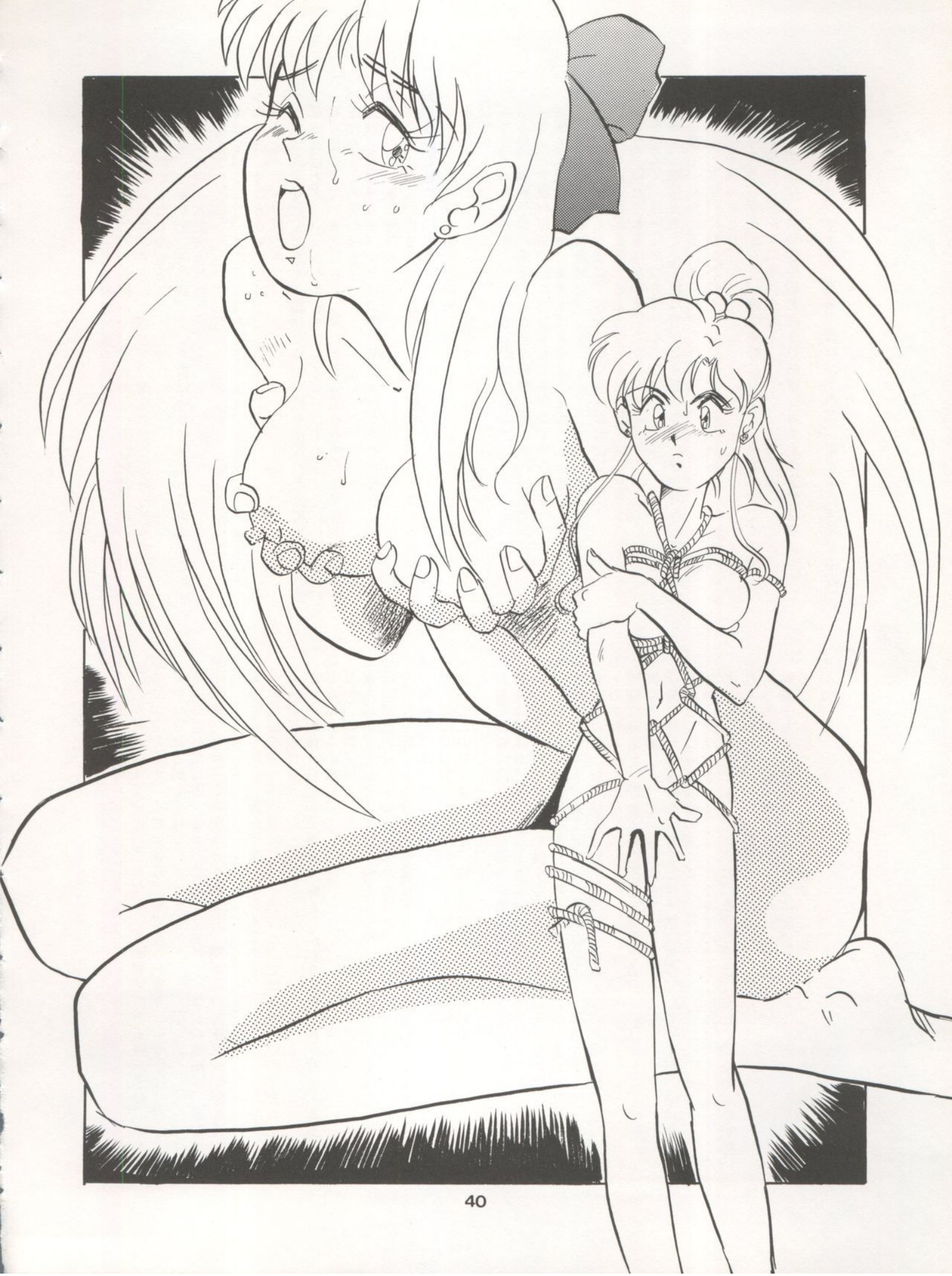
美奈子はちょっときつい感じで一言。
『どうしたの、マコ。恥ずかしがってると、進悟君も恥ずかしくなってしまうでしょ、ほら』
あっ、と進悟は驚いた。
Tシャツを脱いだまことの身体には、なんと縄がかけられ、乳房が多少いびつに絞り出された格好になっている。
デニムのパンツの下には、パンティーこそ履いているが、縄目がすっかり浮き出して、濡れてしみが広がっていた。
それも一気に引き下す。
街で会った時も、大柄で肉付きのよいまことの身体に、縄がしっかり掛けられていたのだ。
沖縄やサイパンのポスターモデルのような、健康的なボディーにしっかり似合うではないか…。
なる程、出会った時に感じた何か……、進悟は少し納得がいった。
二人の関係も、そういう事だったのか。
『ふふふ、驚いたのね、進悟君。でも、マコちゃんは、あの格好が好きなんだから、気にしなくていいのよ』
美奈子が耳元で囁き、進悟のズボンに手を伸ばした。
勢いよく引き下した彼女が、今度はあっと驚いた。
もちろん、子供の物ではない。
色はピンクで嫌悪感こそ感じないが、大きさ、形はすでに並みの大人の物ではなかった。
ビクン、と勢い余って震える物を見て、二人が息を呑むのがはっきりわかった。
その瞬間から、空気の重さが変わったかのようだ。
子供相手に楽しむつもりが、戻ることの出来ない領域へと、明らかに一歩踏み込んでしまう。
きっかけは十分だった。

浴槽には溢れるのもかまわず、細々とだが湯が注がれ続けている。
美奈子とまことは、お互いのあそこが密着するように、足を交差して両側にもたれるように横たわっていた。
進悟はというと、美奈子の胸にもたれかかり、背中に弾力ある乳房の感触を感じながら、まことと美奈子の手が身体中を這い回るのを、なされるままにしていた。
興奮度は押さえて、美奈子のペースに任せている。
まことの身体の縄は、まだ外されておらず、正直戸惑いもなくはないのだが、本人がさして嫌がる様子もないので、静観といったところだ。
『ねえ、進悟君。お姉ちゃんとキス、しようか』
『…うん』

そのままで、首をひねる格好で唇を合わす。
最初は彼女任せで、舌が絡みついてきたら、少しお返し。
美奈子の唾液はさらりとした感じで、進悟のものと合わさって、口の端から溢れてきたものを啜る。
『うん、上手いわ。その調子で、今度はマコちゃんに、キスしてあげてちょうだい。大丈夫よね』
『うん』
身体を起こして、まことに跨る格好になり、進悟のものが彼女の腹をつつくと、まことが喘いだ。
まことの、念願のキス。
彼女は両手を回してきて、進悟は縄目で絞り出された乳房を、思い切り揉みあげた。
絞り出されているとは言え、弾むような張りを持った、素晴らしい量感をたたえた乳房が踊る。
美奈子に比べると、すでに口内の温度は高く、唾液も粘ついて興奮の度合いがはっきり分かる。
美奈子のOKが出るまで、彼女とキスを続けるつもりであったが、一分、二分と経つのに何も言わない。
進悟よりも、まことの息は荒い。
彼女はすっかりメロメロで、気がつくと彼の下半身には美奈子の手が伸びて来ていた。
『マコ、お姉さんなのに、だらしがないわよ』
なる程、美奈子の片手は、まことの肉芽を弄っていたのである。
『さあ、今度は進悟君にお返しをしてあげなくっちゃね』
進悟を、自分の身体に乗せ上げる様に、抱えて引き離すと、まことが彼の両足を浴槽の縁に乗せた。
浮力があるものの、彼の下半身は水に浮いた形になった。
そこへまことが足を抱えるように手をまわし、腹に貼りついている彼自身をすっぽりくわえにかかる。
手を添えて、目一杯に口を開ける。
大きさ、形はともかく、色は若々しくピンクなので、以外と抵抗はなく触る事も、くわえることも出来るのだろう。
しかし、さすがに顎が外れそうな具合で、その悩ましげな表情が進悟と美奈子を満足させた。
美奈子の肩に手を回して、楽な格好になると、今度は彼女の舌が彼の顔を這い回り、やがて口を捕らえる。
美少女二人に、身体中を舐め回されれば、さすがに進悟も高まってくる。
まことのフェラチオは、春名や母に比べれば、まだまだ未熟なものではあるが、それでもこのシチュエーションだ。

さて……と、進悟は考える。
この後の展開だ。
二人の関係はほぼ分かってきたが、S的要素のある美奈子を、いかにしてMに落とすか、これは彼の思惑であり筋書きというわけだ。
これはさほど難しくはない。
子供にされている、とか、まさか子供に…、などの意識は、潜在的なMの要素、ヒロイン願望などを刺激し、簡単に自分を見失いがちになるのだ。
攻めている時に、隙が出来るの例えである。
それに彼の持つ不思議な能力、洗脳とまでは言わないが、それによっても十分可能だろう。
が、それは今日という事ではなく、これから何日かかけて、お互いに楽しみながらの事だ。
だが、美奈子はどうだろう。
友人の弟、ましてこれだけのものを持っている彼を、やはり仕込んで自分に奉仕させたいのではなかろうか。
そうならば、ものは大人顔負けでも、そろそろ出してしまった方が普通の展開になるのではないか。
まして、今日はどこまでいくつもりかも分からない。
焦ってこの美少女二人を、釣り逃す事はできないのだ。

美奈子の首に回された、進悟の腕に力が入る。
同時に身体が、不規則に上下し始めた。
『お姉ちゃん、なんだか僕……、おしっこが出そうだよ』
『いいのよ、進悟君。それはおしっこじゃないの。安心して出していいんだからね……、まこ、しっかり飲むのよ、一滴残さずに』
まことはしっかり腕をまわすと、苦しいはずなのに喉奥深くまで、彼のものを呑み込んだ。
同時に進悟が、貯めていた圧力を開放する。
美奈子が感じとって、ぎゅっと抱きしめてくる。
喉奥に当たるものを、まことは一気に飲み下してゆくが、間に合わずに逆流し、口中に溜まってくる。
進悟は満足しきって、ぐったり身体の力を抜いた。
まことはそれでも口を放さず、最後まで吸い出して、彼のものが勢いをなくし始めて、やっと開放した。
もちろん、一滴も零す事なく呑み込んだ。
美奈子もそれを見て、満足そうに微笑む。
まことはすっかり上気した顔で、こちらも放心したようにうっとりしていた。



三人は今、ベッドの上でじゃれあっていた。
あの後美奈子が促して、ぐったりしたままの進悟を、まことが抱える様にして、身体も拭かずにやってきたのだ。
火照った身体にエアコンの冷気が心地好い。
美少女ふたりに、サンドイッチにされた格好で寝転がる。
まことの胸の弾力を、背中に感じながら、彼のものは今度は美奈子が頬ばっていた。
『ねえ、進悟君。お姉ちゃんのこと、舐めてちょうだい』
美奈子はそう言って、進悟を仰向けにさせると、顔を挟むように跨ってきた。
春名や母の育子とは違い、縦のすじからは、はみ出しもない。
手で広げると、すっかり濡れてはいるが、形も奇麗な小さな作りの秘部が目に映った。
ためらう事もなく、口全体で吸いつくようにして舐めしゃぶる。
肉芽を軽く噛んだり、アヌスにも舌を差し込んだり、こうなってくると進悟の方にも遠慮はなくなっていた。
それに刺激されるように、美奈子の方も舌を這わせ、袋を飲み込み、様々な愛撫を繰り出してくる。
まことは彼の足の指から、少しずつ舐めしゃぶり、股間へと上がってくると、美奈子と一緒に彼のものをほおばる。
そのうちにまた、美奈子の指示で体位を変えつつ、三匹の蛇のように絡み合う。
『まこと、最初は私がもらう事にするわ。手を貸して』
美奈子が足を広げ、仰向けになる。
まことが進悟を誘導して、その間に挿入の格好を取らせる。
そして、股間から手を差し伸べて、美奈子の入口へと導く。
『進悟君、ゆっくり、焦らないで前へ』
まことが彼に上から覆い被さる様にして、腰を押しやり、以外にもぬるっと簡単に美奈子の中に入る。
『うっ』
呻いたのは美奈子の方であった。
十分濡れていたし、抵抗なく感じたものの、それは進悟の方の事であり、美奈子のそこは大して使い込まれたわけではない。
入口はめいっぱい広がっているし、奥を突かれた時など、こんなに巨大と思わなかった自分の迂闊さを、後悔しそうになった。
ただ、年上であり、初めて男にしてやった、童貞を奪っているのだという彼女の意識が、声を出すのを思い留まらせたのだ。
進悟のものは、普段使用しているディルドウなどとは違っていた。
固く太く、長い事はもちろんだが、なにより焼かれているように熱いのである。
まことの誘導によって、前後に動いている進悟のものが、抜けていく時には中を抉っていかれるようだし、突き上げられた時には、内臓まで犯されているほどの、圧迫と充足感があった。
おまけに進悟の、愛撫というには荒々しい、乳房への力一杯の刺激によって、頭の心がボーッとしてくる。
『ああっ、まこちゃん、変だよう』
進悟の計算された一言が、美奈子の感情を揺さぶる。
押さえていた声が、ほとばしった。
『うう、進悟君、いいわ……すごい』
思わず彼女の腰が、彼のものを迎えにいく。
そして子宮を突き上げられ、呻きながら、夢中で彼に腕をまわした。
先程一度出したおかげで、進悟にはすっかり余裕がある。
美奈子の中は、吸い込む様に締めつけてくるし、まことは彼の袋をもて遊びながら、覆い被さって動きをコントロールしている。
だが、美奈子は今日初めて、受け身にまわって喘いでいた。
額に皺をよせ、悩ましげに快感を堪えている様子が、さらに彼のものに力を入れさせる。
少し乱暴かとは思ったが、彼は美奈子の乳首を噛み、引っ張った。
『ひっ、ああーっ……だ、だめぇ……あはっ……』
大きく悲鳴を上げ、彼女は二人を撥ね除けるように、のけ反った。
強烈な締付けに動きが止まった進悟は、さらに反対の乳首をくわえ、今度は噛みながら押し込むように頭を揺らす。
美奈子の連続した叫びがあがった。

進悟を抱えるようにしていたまことの手が、美奈子と彼の間に伸びてくる。
そして美奈子の肉芽を刺激し、さらに快感を送り込む。
『くぅ……はぁ』
美奈子は初めて女になった時の、あの痛みが蘇ってきたかに思えた。
実際には痛みはなく、下半身全体が麻痺したようになっている。
確かにこの感覚は、まことの女同士のものでは得られないもの。
彼女とて、まだ若いのだ。
経験豊富と自惚れてはいても、こういった事もある。
『うわっ、お姉ちゃん、また、まただ』
進悟が叫ぶ。
もちろん、美奈子の絶頂が近いのを気づいてだ。
『いいわ、きて！私の中に、進悟君』
精一杯の冷静さを装う声。
瞬間、彼女の中に、熱いものが浴びせられる。
まことも合わせる様に、クリトリスをつねり上げた。
美奈子は思い切りのけ反り、まるで食い千切るのではないかという程に、進悟のものを締めつけた。
さらに何度も、進悟自身が痙攣するのが感じられた。
『……ぅぁわぁああ』
意識が急速に遠ざかる。
進悟はぐったりのしかかっていく。
一瞬の失神の後、美奈子はぼんやり考えた。
この子から、離れられなくなるかもしれない……しかし、仕込めばかなりのモノになるかも。
彼女の中で、ゆっくり小さくなりかけたものを感じながら、満足感を味わっていた。
と、進悟の裏門に、まことの指がするっと潜り込んだ。
『えうっ』
進悟も驚いたが、出した後だけに抵抗する意思はなかった。
自分はともかく、アナルも快感を得るパーツである事は、十分に知っているのだ。
まことの指が、不思議な刺激をもたらした。
『あっ』
『ええっ』
固さを無くし、小さくなりかけていた彼のものが、見る間に勢いを取り戻してきたのだ。
彼も、また自分の中で感じ取った美奈子も、驚きの声を漏らす。
『私も、私にも……欲しいんだもの』
一人いきそびれて、快感の外にいたまことの実感がこもっている。

ぬるりと美奈子の中から引き抜き、二人のものでべとべとになった進悟のものに手を伸ばしながら、まことは大きく足を開いた。
『ごめんね、マコ。今度はあなたの番ね』
美奈子はそう言って、進悟のものを口に含み、すっかり奇麗に舐めあげると、自らまことの秘部へと導く。
進悟はなされるままに、まことへ覆い被さっていく。
ぶちゅ、という音を立てて、一気に進悟はまことを貫いた。
美奈子はまことの脚を抱えさせ、自分は彼女の顔を挟むように腰を下ろしてゆく。
『マコ、私と進悟君のものよ。すっかり飲み込んでちょうだい』
返事の代わりに、じゅるっと音をたててまことが啜る。
進悟も激しくまことを攻め立てた。
まことの股間に廻された縄が、進悟自身をも刺激して、さらに快感を倍増させている。
両足を担ぐ格好になった進悟を、美奈子が両手で引き寄せて、三人はトライアングルを形作っていた。
美奈子の胸や顔に、進悟のキスの雨。
一方の美奈子も、負けじと応える。
既に二度も放出した進悟と違って、女である彼女の快感の波は、イッた回数とは無縁であるから、息も荒く激しく興奮しているようだ。
同時にまことに対しては、美奈子が激しく乳房をもみたて、掴み、縄を絞りあげ、進悟も脚を噛んだり、肉芽を抓りあげたりした。
まことはというと、Mの資質を美奈子によって引き出されたものか、こちらも身体全体を震わせて、絶頂が近い事を示していた。
やがて最初に美奈子が昇りつめた。
『んはぁああ…』
まことに肉芽を噛まれ、前後に指を突き立てられて、進悟に強く乳首を噛まれてのけ反ると、一際長い声をあげて痙攣した。
進悟はそれを見て、まことの中へしたたかに放つ。
そして、彼女もその衝撃を感じて、二人を乗せたまま大きく跳ねる様にのたうちまわり、激しく果てた。
しばらく三人は、口を利こうともしないで酸素を貪り、絶頂の余韻を味わっていた。

夕方になって、進悟は彼女達と別れた。
あれから、三人はまた入浴して汗をながし、まことの手作りのプリンやクッキーで空腹を満たすと、まるでグルーミングのような時間を過ごしたのだった。
勿論、彼女達が進悟に、絶対の秘密を誓わせたのだが、それとて次回の楽しみを予感させるものでしかなかった。

数日後、進悟のクラスでは、セーラー戦士の話題が休憩時間を独占していた。
普段は塾や稽古事に追われているせいか、TVの話さえ、共通の話題にのぼることは少ない。
木曜だけは、Jリーグのサッカーの話が弾むのだが、今回はちょっと違った噂のようだ。
『…で、セーラー戦士の一人が、どうやら脚をケガしたらしいんだ』
『本当か？まるで見たみたいな事いってら』
『私、信じられないわ』
『それが、三年生のなんとかって奴が、塾の帰りに見たらしいんだ』
『でも、もし本当ならビッグニュースだぜ』
所詮は噂でもあり、ましてTVのニュースに取り上げられる事も少ないセーラー戦士達の事。
しかし、政治や世界情勢と比べれば、身近な話だ。
小学生にとっては、サッカー選手や、TVのヒーローと同じレベルでの関心を集めている。
ファミコンのRPGでもそうだが、敵が徐々に強くなっていくのは当たり前の話、苦戦が続く時期もあるだろうというような事まで、解説者ぶった口調で話す者もいた。
進悟も興味ある話ではあったが、むしろ次のターゲットに想いをはせていたため、その時はあまり熱心に話題に参加はしなかった。

『あっ、ご、ごめんなさい』
『い、いえ、こちらこそ……あっ、うさぎんちの進悟…君？』
『あ、あれ、レイちゃん、い、いや、レイさん』
まだ中学の下校時間ではないが、進悟とばったりぶつかったのは、火野レイである。
見れば右脚首から先が、靴ではなくギプスに覆われ、アルミ製の松葉杖までついているではないか。
『ど、どうしたの？』
『えへへ、ころんじゃって…』
坂の多い、この辺りの事だ。
自然とカバンは進悟が持つ。
ミニのスカートから、すらりと伸びた脚の一際美しい彼女。
怪我をした痛々しいその姿が、妙になまめかしい。
性格もそそっかしい処も、姉のうさぎによく似てる。
そんな事を考えつつ、しかし全然色っぽさが違うんだよな…などと、年上の美少女と並んで歩きながら、嬉しさが隠せない。
『そーれぇ！頑張れ、あと少し』

『うう―っ、だあ―っ』
火川神社の前まで来て、最後の石段を進悟がレイをおぶって、懸命に登っていく。
途中までは自力で登った彼女も、さすがに疲れたのか、ケーキセットを付けるからと、茶目っ気たっぷりに持ちかけたのだ。
さすがにきつい。
しかし、抱えた太股の張りのある感触も、背中に押しつけられる豊満な乳房の圧迫感も、彼にとってはこの上ないご馳走だ。
少女の馨しい汗の香りも、首筋にさらさら触れてくる髪の毛も、さらにアドレナリンを上昇させる。
とうとう登り切った所で、進悟は彼女を背負ったまま、尻もちをついてひっくり返ってしまった。
『ったーい！ああん』
『いてて、ご、ごめんね』
『ううん、よく頑張ってくれたわ。はい』
そういって、手を差し伸べて引き起こしてくれと、彼女は微笑んだ。
進悟が屈んで手を差し出すと、Mの字に開いた股間はすっかりスカートもめくれ上がっていて、白地にピンクの花びらを散らしたパンティがはっきり目に入った。
『ん？やだ！エッチ』
大して慌てた様子もなく、そういってゆっくり立ち上がる。
すぐに彼も杖を渡して、二人は社務所の方へ向かった。
『あら？だれもいないなんて…』
彼女について玄関から居間へ。
テーブルの上にあった、メモを見つけたレイは、いきなり大声をあげて罵る。
『あの生臭じじいめ。なにがパチンコの開店よ。孫がケガした時くらい、家に居てもよさそうなもんだわ。おまけに雄一郎まで…』
あっけに取られて、進悟はなすすべもない。
『あら、ごめんね、はしたなくって、おほほほほ…』
うさぎと違って、こういった処でさえ、彼女には色気があるように思えるから不思議である。
『ちょっと待ってて。すぐに着替えてくるから。冷蔵庫に、たしかあるはずなの、ケーキ。よかったら、出しといてくれないかなぁ』
『いいよ。慣れてるから』
『ごめんね、お客様に色々させちゃって』
進悟は二人分のケーキとアイスティーを素早く用意して、お盆に乗せてテーブルへ。
『進悟くーん。こっち、おねーさんの部屋まで持ってきてぇ』
本当に、性格はそっくりだ。

そんな事を考えつつ、呼ばれた声を頼りに奥へ。
やがてサッカーとアニメの話で盛り上がり、以外と打ち解けてしまった頃、電話が鳴るのが聞こえた。
『ちょっとごめんね。その辺の本、適当に読んでてもいいから』
サッカーマガジンやアニメ誌の並んだ本棚を指さすと、ぎこちなく杖をつきながら、慌てて居間の方へ出ていった。
本棚にはさして興味はなく、本来なら部屋全体を物色したいぐらいではあるが、それも迂闊に過ぎる。
それでも何気なく見遣った棚の、一番下の段、前後二列に本が並べてあるのが目に止まる。
男なら、ベッドの下などが候補であるが、そんな雰囲気を何となく感じて、手前の本を取り除いてみると、あまり見たこともない装丁の本が大量にある。
数冊を引っ張り出し、中をめくって思わず絶句。
だが、一瞬後には子供とは思えない笑みが浮かんだ。
やがて部屋に帰ってきたレイは、進悟の前に広げられてる本を見るなり、さっと顔色を変えた。
『あ、これって、たしか同人誌って言うんだよね。…へぇ、女の人もこういうのに興味あるんだね』
所謂ヤオイ系の同人誌。
それも、絵、文章ともに、ソフトとは言い難い、過激なものばかり。
中には美少女系の、修正ナシのしろものまで混じっている。
『えへ……ね、ねぇ、誰にも言わないって、約束してよ。特にうさぎにはさぁ。一生のお願い。ね、ね』
慌てた風だが、そこはまだ余裕を見せて、茶目っ気たっぷりの出方である。
『どうして？別にいいじゃん。これくらい、中学生なら、皆幾つかは持ってるんじゃないの。裏ビデオくらい、僕だって見たことあるし』
『えーん。そうじゃないんだってば。ね、この通り』
『どうしようかなぁ。別に喋るつもりはないけど』
『本当？お姉さん、恩に着るわ』
『じゃあ、一つ、僕の言うこと聞いてくれる？』
『聞く聞く！だから…』
『じゃあ、この本に載ってるのと同じ事、今ここでしてみてよ』
『えぇ？』
一瞬の後、レイの瞳の中に、はっきり不安の影が覗いた。
進悟がどういうつもりか、薄々気がついてはいるが、いくらなんでもまだ子供相手という考えが、それを肯定させないようにしているのだ。
彼女の、目まぐるしい動きをみせる心理状態を、進悟は歳に似合わぬ冷静な目で観察し、次の一手を待っている。

『恥ずかしいんなら、僕も一緒にしてあげるよ。ほら、そうすればお互いに内緒に出来るじゃない』
躊躇しながらも、レイは完全に否定して、拒否するという事に考えが及んでないようだ。
バカな事を、そう言って有耶無耶にしてしまってもよさそうなものだとは思うのだが、年下の、しかも友人の弟という、彼女の好みの状況下でもあるのだろうか。
一方では、進悟に半ば強制されてはいる格好だが、どこかでまだ、優位に立っているのかもしれない。
例えば、お姉さんが教えてあげる、といったシチュエーションを、彼女自信も何処かでシュミレーションしていたとか。
やがて長い間の後、彼女は以外とはっきりした口調で言った。
『一度、一度きりよ』
『う、うん』
『本当に一度だけ、見るだけ。お願いよ…』
『うん、わかってるよ……』
お互いに守られないであろうと知りながら、お約束の台詞。
クッションを手元に引き寄せ、背もたれ代わりにしながら、レイはTシャツの裾をデニムのミニスカートから引き出した。
進悟も膝を進めて、本当に息がかかる程近くによった。
すでに自分自信に酔ったかのように、彼女の瞳は潤んでいる。
進悟も珍しく、唇が乾いているのに気がついた。
ためらいもなく、イッキにTシャツを脱ぎさる。
白く張りのある乳房が、大人びたデザインのブラから、零れんばかりに自己主張している。

彼女は巧みだった。
ミニのスカートはサイドのファスナーを開け、ウエスト方向に託し上げる。
フロントホックのブラは、僅かに胸を覆い隠している。
脚の大きく固めたギプスに、違和感を感じないように、オールヌードにはならない。
今彼女は、左手で乳首を弄びながら、半分ずり下げたパンティーに右手を突っ込み、目を閉じてオナニーに耽っているのだ。
すでにパンティーには、シミが広がっている。
こうした状況の中でさえ、彼女には自分自身をよりアピールする仕種が備わっているようだ。
進悟もパンツごとズボンを脱ぎ捨てて、屈み込む格好になっている。
進悟の手が、彼女のパンティーにかかる。
ピクッと動いたが、拒む様子はない。
左脚を持ち上げて、器用に片足を外すが、右はギプスに引っかかってとまった。
無言で協力しながら、彼女の指は己の肉襞に埋もれたままだ。
『ねえ、じっとしてて』
脚を大きく開いた格好で、ずり上がりながら頷く。
背中にあったクッションが、腰の下あたりに来て、進悟にもよく見えるかたちになっている。
さらに進悟は手をどけさせる。
すでに十分熟れた美少女の秘部が、少し口をあけたように彼を誘っていた。
腰を両手で掴み、己の分身をあてがう。
『くっ…』
今まで殆ど声を上げなかった彼女も、辛そうに身を捩る。
二、三度スラストさせながら、子供とは思えぬ力強さで、奥まで一気に埋め込んだ。
『ううっ、はっ』
どうやら彼女は経験十分らしい。
姉の友人で、彼が関係したのはこれが三人目だが、一体どうなっているんだ。
最近は中学生くらいで、皆初体験くらい済ませているのが当たり前なんだろうか。
自分の事を棚に上げて、ふとそんな事を思う。
奥へ吸い込まれそうな感覚が、今までの女性達とは違っている。
しかも、とびきりの名器というやつかもしれない。
しかし一方で、進悟はこのまま中へ注ぎ込むつもりはなかった。

彼のものが、全体にぬめりを帯びると、一度ゆっくり抜いてしまう。
『ど、どうしたの？あっ…』
彼女から溢れた滴を、巧みに進悟はアナルに塗り込み始めた。
『レイさん、さっきの本の中じゃ、男同士が、こっちでしてたじゃない。レイさんは女だけど、僕も同じようにしてあげるよ』
辛そうな、それでいて快感を堪えるような表情を見せながら、頷く代わりに左の脚を大きく抱えあげ、進悟の動きを助けた。
どうやら彼女、こっちの方も経験済みらしい。
『やぁん…』
指を潜り込ませると、悩ましく声が出る。
すっかり慣れた様子だ。
しかし進悟としても、征服欲が萎えるどころか、ますますいきり立ってくるのだ。
しっかり揉みほぐしている間も、とろとろと溢れてくる滴が多くて、五分近くですっかり準備はできてしまう。
バックのスタイルを取らせて、後ろから挿入していくのが一般的だろうが、右脚のギプスの事もあるし、彼としても、美しい顔の表情が見れないのは残念だ。
そこで正面から、右脚を抱えあげた格好で（所謂松葉崩しに近い）挑む事にした。
これなら顔も見えるし、小柄な彼にも楽なスタイルだ。
脚を抱えると、彼女が自分で尻を広げてくれる。
先端を慎重にあてがうと、一定のリズムで押し込んでいく。
『くっ、ふうう』
カリの部分が大きく周囲を埋没させながら、ズブズブと沈んでいく。
やがて一番太いところが通過してしまうと、埋もれていたアナルの周辺がもどってきて、やがて根元まで見えなくなった。
ツルツルの彼の下腹部が、きっちり太股にひっついている。
『ぁはぁ～、ぅふううう…』
完全に埋め込んだとはいえ、彼も彼女も馴染むまでは、とても動けたものではない。
フリーな左手で、硬くなったクリトリスを探る。
レイは自分で乳房を弄っている。
『う、うん…』
『あ、ううん』
お互いに、なじんできたのが分かる。
ただきついだけの締めつけだった入口付近も、特に動きをみせなかった内部も、まるで生き物のように緩急自在の動きである。
進悟は驚いていた。
膣はともかく、直腸をこれほどのテクニックで動かせるとは。

次第に高まってくるのを感じて、進悟もゆっくりと抜き差しを開始した。
普段の半分程の時間で、我慢が臨界に達してしまいそうだ。
虚ろな視線で、喘ぎ声をあげる彼女の方も、すでにトランス状態に近い。
『うわぁっ！』
大きく担いだ脚を抱きしめて、一際奥に腰を打ちつける。
大量の白濁が、一旦根元で締めつけられて、間隔を開けて注ぎ込まれる。
進悟は初めて、目の前が暗くなるような射精を体験していた。
さらに、痙攣が収まっても、普段ならすっかり萎える筈の分身は、痛い程の硬さを保ったままなのだ。
『ひっ、ふぁあっ』
彼女の方も、オルガスムには達したものか、進悟のなすがままになっているばかり。
しかし、絶妙の快感を与えてくるのは変わらない。
コントロールも効かずに、再び抜き差しを開始して、暫く後には二度目の射精で彼女の腸内を満たしていた。
『……ぁはぁあ…』
彼女も長く息を吐き出して、満足したことを示す。
すっかり汚れた彼自身は、彼女が口で後始末してくれた。
レイはと言うと、ティッシュを当てても、あまりに大量のものが溢れてくるので、身なりを少し整えてから、進悟が手伝ってトイレに連れて行った。
彼女の放尿、排泄を目の当りにして、再び興奮した進悟は、その場でレイのフェラチオによって、三度目の放出を迎え、さすがに疲れた二人は、今度こそ普通に休息を取った。
『私、進悟君なら、いつでもいいから…』
帰り際にそう囁かれて、今までになく嬉しさがこみ上げてきた。
確実な収穫。
さすがにこのときばかりは、他の誰かを思い浮かべる事もなかった。
すっかり夕闇に包まれた住宅街を、足早に家へ向かう。
今夜はぐっすり眠れそうだ。

二週間程が過ぎた。
進悟はその間、偶然から姉の親友でもある、大阪なるを犯していた。
夕方の人気のない公園のトイレで、彼女が海野と関係しているのに行きあったのだ。
かなりの変態プレーぶりだ。
目隠し、手は後ろで縛られた状態の彼女は、洋式の便座を抱く格好で

海野に後ろから攻められていた。
おそらく、排泄プレーなどの後だろう。
やがて彼女とともに海野が果てた時、近くにあった立ち木の看板の鉄棒で、彼の後頭部に一撃をお見舞する。
手足を逆さに、彼のベルトで縛り上げ、靴下を口にねじ込んで、隣の掃除用具置き場にほうり込む。
そして、彼にかわって、意識朦朧としたままの彼女に、満足するまで注ぎ込んだのだった。
人気は絶えたとはいえ、野外でのこうした行為の持つ魅力、緊張感に進悟はしびれた。
無理やり、という形は好きではないはずだったが、慎重なだけでなくこういった大胆なやり方も、精神を高揚させ習慣性を伴うのだろうか。
それからというもの、進悟の中では何かが変わったのかもしれない。

『いいよ、みかちゃん、僕もついていってあげるって』
『ううん…一人で帰るからいいの…』
多少の遠慮をしながら、クラスメートの彼女も送って欲しいのだ。
生理が訪れているのだ。
心配そうな顔をしながら、進悟にはすでに計画が出来ていた。
やがて彼女の家に着き、心配性の母親もそこは慣れたもので、進悟にとりあえずお茶など勧めて、彼女を部屋で寝かせてくる。
しかし今日の彼の目標は、この二人、親子の身体なのである。
久々に彼は、能力を発揮する。
強力な催眠、もしくは洗脳に近い精神感応力である。
内気な性格の人妻など、身体に火種を抱えているも同じ事。
やがて自ら進んで、彼のいいなりとなってしまう。
さらに、浅い眠りに入っていたみかを、こちらも母親と二人してものにしてしまう。
もともと彼女は、進悟に好意を持っているのだ。
多少おませな娘なら、なだめすかしても可能かもしれない。
それを催眠ずくで、母親が手を貸すというのだから、進悟にはこの上ないご馳走だった。
催眠による沈痛効果もあったはずで、二人の記憶を削除したために、あとで酷い生理痛に悩まされたようにしか、思わないはずだ。
小さな造りの彼女の秘部を、血まみれの彼の一物が出入りするのは、旨虐性を満足させるものだった。
翌日顔を合わせた時に、以前と変わらぬ態度だった事からも、彼の能力が十分に発揮された事が分かった。
このところ、進悟は忙しいくらい充実した、性生活を過ごしていた。

一方で、彼の能力はさらに高まり、獲物を求めてさまよう肉食獣のような雰囲気が、少し大人びて見せていた。
変声期にも入り、回りもなんとなくそういった目で見ていた。
しかし実際は、発情期の獣そのものだった。
学校では今まで通り、普通の状態を装っている。
セーラー戦士の、最近の苦戦の状態などが噂されていたが、やはり彼には関心外のことだった。

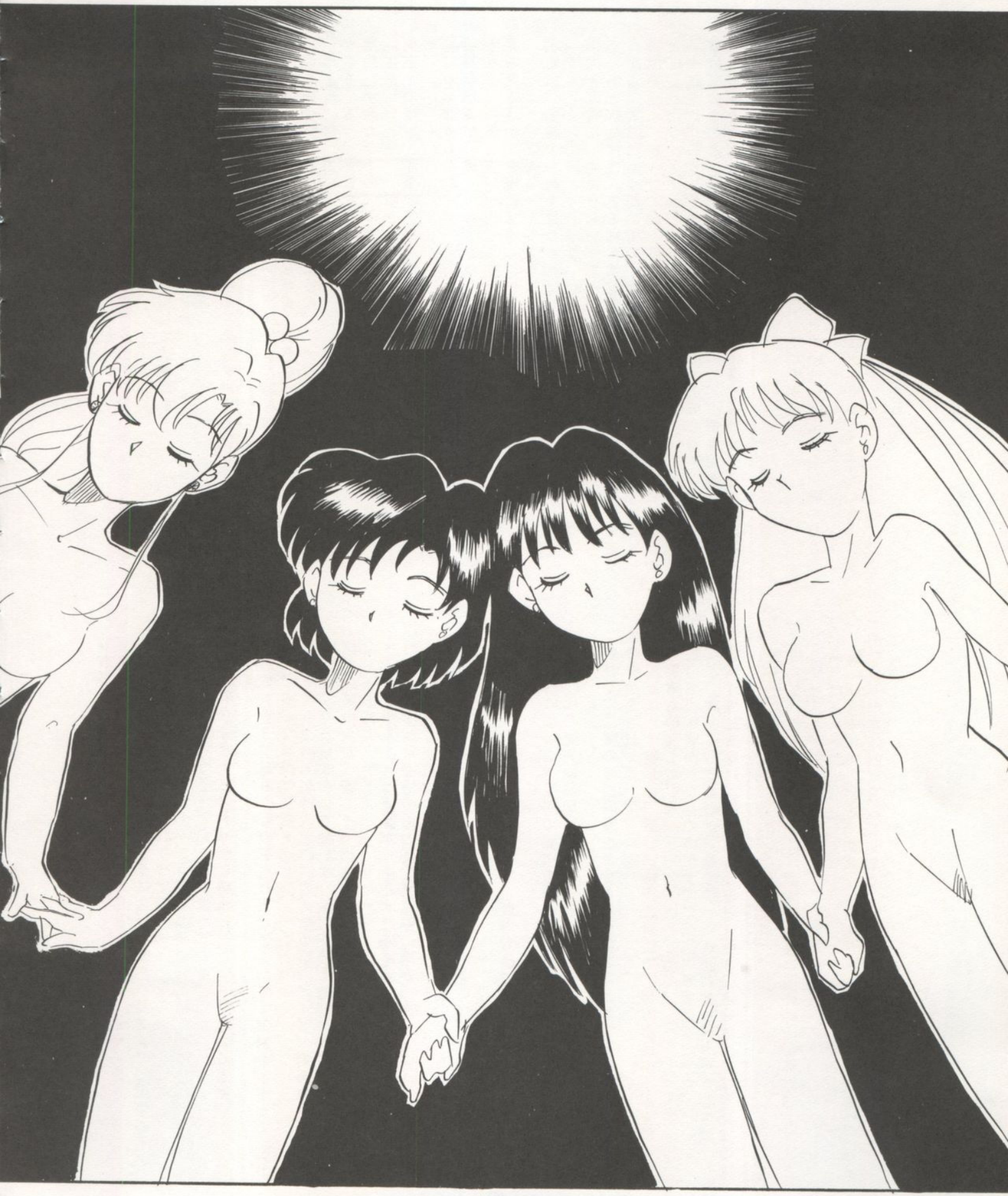
彼はおろか、セーラー戦士達も気づいているのかどうか……苦戦の原因はここにあった。
五人の戦士のうち、三人までが進悟と関係している。
つまり、彼女達の身体の中には、彼の（妖魔から受けたエネルギーで変化を起こした、パワーやエネルギーで満ちた）体液を、何度となく注がれているのだ
微量の毒を徐々に用いるのと同じで、なかなか原因は掴めないし、まして敵がパワーアップしているのだからなおさらだ。

進悟は帰りにまず、まことのマンションへ向かう。
美奈子は学校が違い、早く来ている場合もあるし、その反対もある。
いづれにせよ、今や彼女達二人は進悟の奴隷に近い状態だった。
すっかり言いなりで、最初は抵抗した美奈子でさえ、アナルを犯されスパンキングされ、縄に掛けられても文句一つこぼさない。
それどころか、もともとSだった筈なのに、進悟が巧みに彼女のM的要素を導き出してしまい、所謂両刀のタイプに変わってきている。
Mの資質のあったまことはさらに、美奈子と進悟二人にサンドイッチで犯されて、ようやく満足する程になっている。
ある日、進悟は思い切って二人に、ある計画をもちかけた。
『亜美ちゃん、彼女をものにしたいんだ。』
『そんな……私達じゃダメなの？』
『いやっ、もっと何でも言うこと聞くわ。だから…』
『別にそんな事は言ってないよ。新しいペットとして、僕等三人で可愛がってやれるじゃないか』
『ほんと？私達を捨てるんじゃなきゃ、何でもするわ』
『あ、私も、何でも言ってちょうだい』
普通なら考えられない事だろうが、意識というのはこうしたものだ。
こうして簡単に、亜美を仲間に引き込む計画は立ってしまう。
まことが彼女をここに連れてきてしまえば、何とでもなるのだ。
予定は早々に実行された。
今、水野亜美は、下着だけの状態で目隠し、耳栓、猿ぐつわをされた

上に、後ろ手に縛り上げられて転がされている。
おまけに、さっき飲ませた紅茶には、催淫剤、入眠剤、下剤が大量に混ぜられていたのだ。
腹痛と眠気が思考力を奪い、さらに火照ってしょうがないはずの下半身を中心に、美奈子とまことが二人掛かりで急所を攻めているのだ。
普段冷静な彼女も、身体中脂汗を流しながら、肉塊に成り果ててしまうのを止めようがなかった。
的確にポイントに送り込まれる快感、沸き上がるように襲ってくる排泄欲、状況が分からない事に対する不安。
それぞれが正常な思考力を奪い、初めて経験する理性で押さえ切れない身体の疼きが、知らぬ間に床を濡らすほど、大量の愛液を溢れさせていた。
『んふーっ、っんぐっ……ん』
『すごい反応ね、彼女。普段とは違って、なんてお下品なの』
『まったく。こっちは羨ましいくらいだわ…ふふふ』
もちろん、亜美の耳には入ってない。
進悟の手が、緩くなりかけたアナルをマッサージし始めると、一際うめきを上げて、大きく首を振る。
そろそろ限界に近いのだろうか。
どっちにしろ、トイレに行かせるはずもない。
まことと美奈子も、いっそう激しく愛撫を始める。
乳首が薄い生地を通して、はっきり見える程尖ってきていた。
綿の可愛いパンティーなどは、すでに水を浴びせられた程の濡れ具合で、太股には美奈子の長い髪が張り着く程滴っていた。

身体全体が痙攣したように、びくっ、びくっ、と跳ねる。
じゃまになってきた、びっしょりのパンティを、進悟は膝のあたりまで下げていく。
愛撫を続ける美奈子も、器用に協力して抜き取る。
『そろそろバケツを、用意しなきゃ』
『いいわ、まこ、頼むわね！』
美奈子に促されて、まことが後ろから亜美を抱えあげる。
排泄させるときの格好である。
おおきく広げられた足の間に、美奈子はまた顔を突っ込み、バケツをあてがう進悟を他所に、ひたすら亜美に快感を与えていた。
右手の指が、不意に漏れないように、アナルに差し込まれていて、栓をしたようになっている。
ぐるるるるっ、と彼女の下腹部が振動している。
括約筋が幾たびかの、不規則な絶頂時の動きを指に伝えてきた。
『さあ、いっちゃいなさい！』
美奈子の指が、亜美の肉芽を抓りあげ、同時にアナルからは抜き去られた。
『んぉぉぉんんん』
亜美の悲鳴が、猿ぐつわをされたままで響き渡った。
すさまじい音と臭いが辺りに充満する。
見る見るバケツを埋めてゆく。
『やっぱり、亜美ちゃんのでも臭いや…』
『まあ、私達のも散々見たくせに』
『でも、これで終わりじゃないからね』
排泄と同時に、すさまじい快感が彼女を絶頂に導いていた。
もともと排泄には、ある種の快感が伴うが、催淫剤による効果もあるのだから、これはもう初めてのすさまじい快感だったに違いない。
排泄を終え、ひくひく動く肛門を洗い流すかのように、黄金の水滴がほとばしった。
『やれやれ、こうなちゃ我が校一の秀才も、形無しね』
普段Mのまことが、そんなことを言ったので、進悟は可笑しかった。
先ほど抜き取ったパンティで、汚れた下半身を拭いながら、美奈子も笑う。
まことがバケツを処理しに行く。
進悟は亜美に噛きながら、猿ぐつわを外してやる。
『いいかい、亜美ちゃん。歯をたてちゃいけないよ。もし噛んだりしたら、耳をそぎ落としてもいいんだ。』
亜美には充分わかっているはずだが、上手な調教は、飴とムチ、即ち快感の後には、こういった脅しが有効なのだ。
進悟のすさまじい怒張が、亜美の口に突き込まれた。
美奈子は今度は薬液を、注入している。
市販の浣腸液だが、通常の二倍、三倍と、次々に注入していく。
亜美の顎は、まるで外れたように大きく開かれたままで、進悟のものをくわえたまま、唾液を溢れさせていた。
まことが戻ってきて、クッションを進悟の背に敷く。
隣に並んで座った格好で、キスを求めてくる。
進悟が手を伸ばすと、すっかり濡れたそこは、普段よりも熱いかのようだ。
一方美奈子は、進悟のものをくわえ、膝をたてて便意を我慢している亜美に、様々な手段で快感を送り込んでいた。
アナルストッパーが挿入され、前には小型のバイブが刺激を与える。
『ほおら、よくほぐしておかないと、彼のは特別だから…』
栗毛の美少女が、楽しそうに攻めている図は、まったく絵になる。
『んぁあああっ』
バイブを挿入された亜美が、思わず悲鳴をあげた。
口からこぼれた進悟のものを、まことの手がつかむ。
『ねぇ、待ち切れないから、ちょっとだけ』
『しょうがないなあ、まこちゃんは』
素早く彼に背を向けて、自分の中に沈めてゆく。
長い吐息が漏れる。
『まこ、一人で先にするなんて、貴方も後で、お仕置きが必要なようね』
そう言いながら、亜美の秘肉を抉る手は休めてない。
規則的に、亜美の嗚咽が聞こえていた。

やがて、二度の強制排泄をさせられた亜美は、美奈子の手によって腸内の洗浄をされて戻ってきた。
幾度となく体験した、激しい絶頂と排泄で、足もとはふらふらであるし、思考も停滞していた。
腕の戒めを解かれたものの、すでに抵抗の意思はなかった。
『さ、楽〜にしてるのよ、息をゆっくり吐いたり吸ったりして』
名残り惜しそうに、進悟のものを引き抜き、自分は横になった彼の胸の上で、亜美を抱えあげて下ろして行く。
美奈子が手を添えて、導く。
緩くなった亜美のアナルは、巨大な進悟のものを、以外なほどすんなりと受け入れていった。
『うはぁああ』
額から脂汗を滴らせて、痙攣しながらも、三人がかりの誘導で、根元までしっかり体内に没してしまう。
『おうっ、こりゃぁ…』



亜美の腸内は、進悟に素晴らしい快感を与えてきた。
美奈子のような、テクニックがあるわけではない。
普通は入口の強烈な締付けと、内部の粘膜の感触が、アナルの味ともいえるのだが、進悟の先端部分が、直腸の終わりまで達して、幽門部が亀頭を、やんわり包み込んでくるのだ。
『うはぁ、あふぅ……』
喋る事も出来ない亜美に、後ろからまことが動きをくわえる。
前に回っていた美奈子は、いつの間にか双頭の湾曲したディルドゥを取り出して、片方を自分に埋め込んでいく。
『亜美ちゃん、前は私が貰ってあげるわね』
そう言って、脚を肩に担ぎあげると、一気に押し込んでいく。
亜美は言葉を発することも出来ず、ただ、頭を振り、身体を海老のように、跳ね踊らせるだけである。
進悟はまことの美味な秘肉を啜り、強烈な括約筋の締めつけと、美奈子の動きを伝える、ディルドゥの粘膜越しの感触に酔った。
サラウンドの様に聞こえてくる、三人の美少女の喘ぎと、身体のぶつかりあう音も、心地好いスパイスとなって、快感を高めていく。
誰が先に達したかは分からなかったが、強烈な快感の波動が、三人を包み込んだ。
進悟は今日初めての、己の欲望を、亜美の体内深くに、これまでにない程多量に注ぎ込んだ。

最初に身体を起こしたのは、まことだった。
多量の放出にもかかわらず、一向に萎える気配もない進悟のものを、亜美の身体を持ち上げて外す。
美奈子に被さるように、力なく倒れた亜美のアナルは、ぽっかり口を開けていて、ぬるぬると進悟のものが、溢れていた。
まことの口が、進悟のものを奇麗に舐めあげていく。
ついで、まことはベルトに固定された、疑似男根を装着していく。
美奈子は手際よく、亜美を進悟に重ねると、今度は前へと埋める。
『くぉおおっ』
短く亜美が呻く。
進悟のものが、一気に彼女の子宮まで達し、それに押されてアナルからは、先ほどのなごりが溢れだす。
それを潤滑剤にして、まことが今度はそこへ疑似男根を挿入していくと、再び燃え上がってくる快感に、亜美の身体がしなり始める。
重なった三人の後ろからは、さらに美奈子が挑み、まことの後ろへと先ほどからのディルドゥを、ずぶずぶと沈めていった。
いつの間にか、誰かが失禁したらしく、生暖かい液体が進悟の下半身を濡らしていた。

思う存分、亜美の口中を舐めまわしながら、手を伸ばしてまことの乳首を捻りあげる。
一方まことは、進悟と亜美の間に手を入れて、彼女の肉芽を抓る。
進悟が再び噴き上げるまで、先ほどより時間がかかったのは、間違いなかった。
しかし、今度は亜美も、苦痛より快感が上回ったらしい。
幾度となく絶頂し、最後には彼のものをしたたかに浴びて、失神して果てた。
粘液と汗が飛び散り、四人はこれまで経験したこともない快感の、大きなうねりに飲み込まれていた。

委えることを忘れたように、進悟はこの日何度も何度も、三人に挑んでいった。
メインのターゲットだった亜美は、それぞれ三人から嬲られつくしていたが、すぐに自分から求めるようになっていた。
進悟は亜美に、前二回、後ろ三回は注ぎ込んだが、まことと美奈子にも、しっかり搾り取られた。
三人を相手にしていると、いかな絶倫でも疲労もしよう。
視界はほとんどの場合、遮られている。
三人の美少女の秘部が、あるいは貪欲に貪るようなキスが、彼を夢見状態に誘う。
時折、喉の乾きは、口移しにジュースなどを飲ませてもらい、飽きる事なく三人を貫き続ける。
部屋の中は、獣の臭いが充満していた。
やがて日も暮れかけた頃、この部屋に侵入者があったが、進悟はまったく気付かなかった。
二匹の猫と、そして火野レイ、さらに姉のうさぎの姿。
しかし、口移しに飲まされたジュースの中には、睡眠薬でも入っていたのか、進悟の意識は朦朧として、性欲のみが彼を支配していた。
全裸になったレイが、進悟に跨った事さえ、以前気がつかない。
やがて、この日何度目かの放出がレイの子宮を叩き、進悟は眠りに落ちていった。

進悟を囲み、結界を結ぶように取り囲んだ少女達。
眠っているはずなのに、その剛直は起立したままだ。
うさぎの手が、溢れ出ている彼の樹液を掬い、口へ。
『うえ、ぎもぢ悪い。』
『うさぎちゃん、急いで！』
ルナが急かせる。
『いいかい、彼は特異体質だから、こうして完全な融合が完了するま

で、何も出来なかった。しかし、再び目覚めてしまっては、もう二度とチャンスはない！五人のセーラー戦士が、その体内に彼の体液を取り込む事によって、結界の力を最大に発揮し、内部から浄化するのだ』
『はるなやママの様に、簡単に記憶を消したり、リフレッシュ出来るなら、こんなに苦労はしなかったのに…』
『さあ、うさぎちゃん！』
『ええ』
白い閃光が辺りを包む。
満月の夜空に、一筋の稲妻が轟いた。

『ううん、ぁあれ？ここは…』
『気がついたのね、進悟』
自分のへ部屋の、ベッドの上だ。
『日射病ですって。まこちゃんが、あんたをおぶって、家まで連れてきてくれたのよ』
『ふーん…』
進悟の記憶は、過去のその事に絡んでいる部分が、すっかり欠落していた。
うさぎは、これで再び元の生活が始まる事を、確信していた。

～エピローグ～

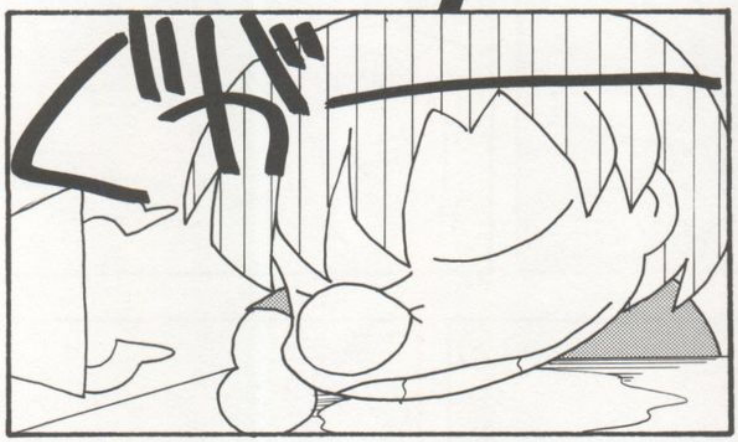
三ヵ月が経っていた。
進悟は生長期に入って、すでに身長は十センチ以上も伸びていた。
もちろん、変声期を迎えて、それらしい声にもなっていた。
普段の生活は、以前と少しの変わりもなく、平和そのものだが…。
記憶の断片が、戻り初めて一ヵ月。
驚くべきことに、眠っていた間の、セーラー戦士達の記憶さえあるのだ。
秘密にして、深刻な状況に思われた。
ようやく、過去の記憶を手に入れた進悟だが、もちろんうさぎには、話していない。
いや、話すことが出来なかった。
成長期のホルモンのバランスか、あるいはその特異体質ゆえか、守護星の影響か、そんな事はどうでもよかった。
ただ、あれ程自由になった、妖魔の力は完全に失せていて、その事のみは、安心材料ではあった。
とはいえ、思春期を迎えた、異性に興味のつきない年頃である。
まして、あれ程の快感を知ってしまった彼にとっては、オナニーなどで、普段の性欲解消ができるものではなかった。

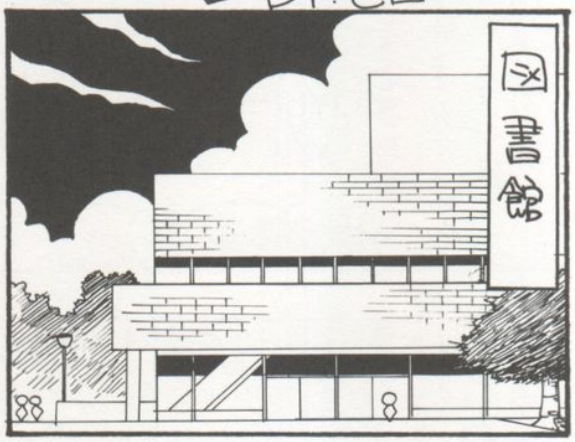
思い悩んだ末、思い切って美奈子に打ち明けたのが、つい二週間前。
良かったのか悪かったのか、以来彼女とは元の関係に戻ってしまっているのだ。
もちろん、まことも含めて、以前のような派手な関係になるのも、時間の問題だった。
いくらセーラー戦士とはいえ、彼女達だって、人並みの性欲もあれば悩みもあろう。
まして、決していやな思いばかりでは、なかったはずなのだ。
週末になると、進悟はまことの家に、出かけて行く。
すっかり秋の気配も濃くなった街に、平和な時間が流れていた。

どこがー体 美少女戦士

亜美ちゃん大爆走

Dr.モロー





ピーポーピーポー
危ない所だったわ…エアコンがきいてたからつい…
おなかをひやすとよくないのねーっ勉強になったわ…
FAXにあらず
あっ
トイレットペーパーイズナッシング!!
オーマイガー!!
ううむ…こんなエマージェンシーにも教養をたれ流してしまう自分が恐いわ…
さて…どうやってこの大ピンチをのりきるか…
考えるのよ亜美!!その天才的頭脳で!!
①ふかずに出る
だめよ!!そんなこと美少女のするべきことじゃないわ
②参考書でふく
だめよ!!そんなもったいないこと
③手でふく
だめよ!!この美しい手でそんなこと神様がお許しにならないわ

④となりの個室から調達する
これよ!!これしかないわ
個室は天井があいてるからなんとか隣まで…
よっしゃ!!行くべし
どえーっ
じたばたじたばた
よっ
ふっふっふ成功だわ!やっぱりあたしって天才ね!
ん

すごぉん

キャーッ

わー、さわぐな

マーキュリーパンチ!!

フッ…キジも鳴かずばうたれまいに…

おっとトイレットペーパー発見

残る問題は死体の処理ね…

何か問題がどんどん大きくなっているような気がするのは気のせいかしら…

もとの個室に戻って…

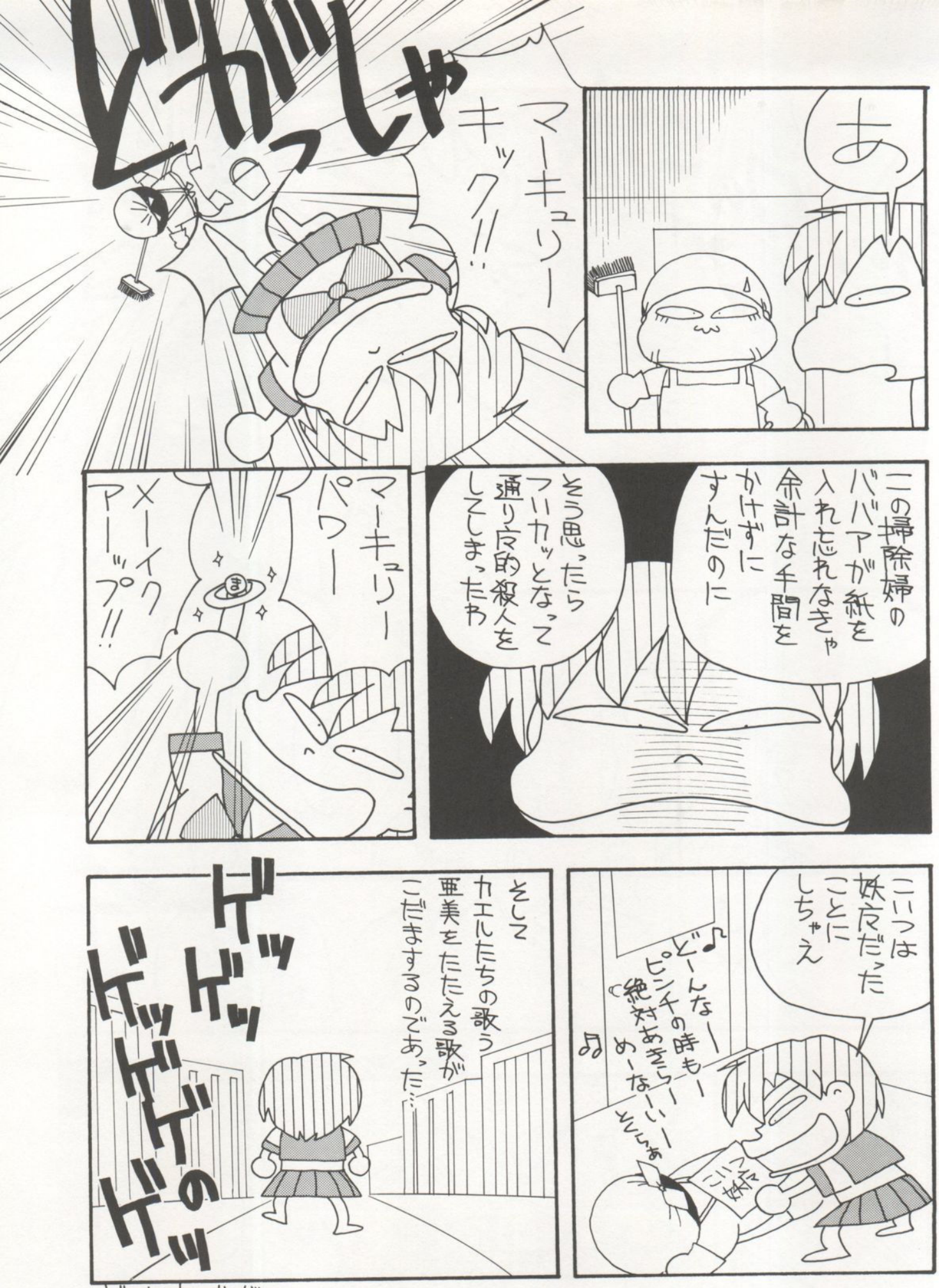
よっこらしょっと

ここから出て行けば密室殺人成立ね!!

→なんでやねん

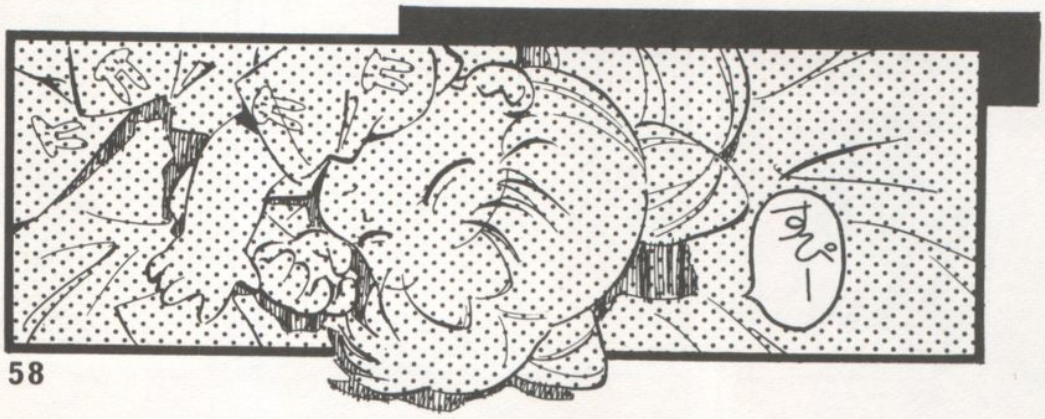
ジャー

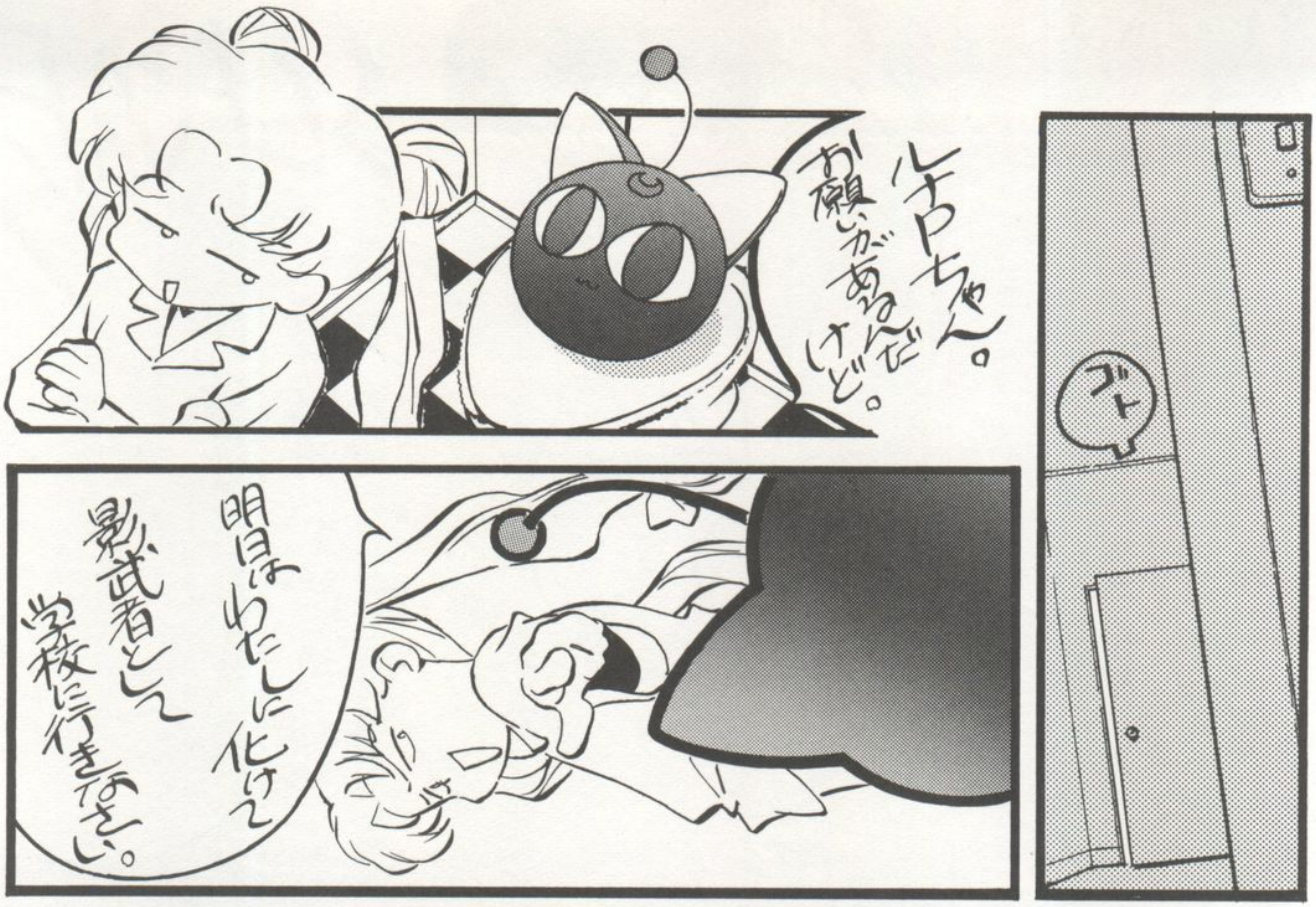
ガチャッ

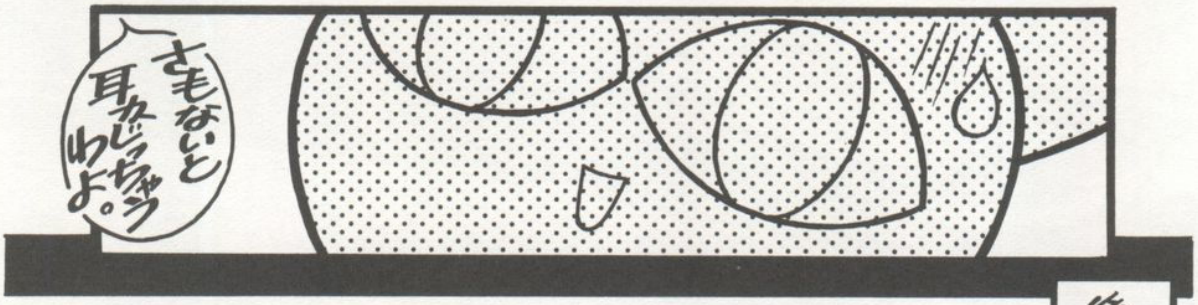

あ
マーキュリーキック!!
どがっしゃ
この掃除婦のババアが紙を入れ忘れなきゃ余計な手間をかけずにすんだのに
そう思ったらフいカッとなって通り魔的殺人をしてしまったわ
マーキュリーパワー
メーイクアップ!!
こいつは妖怪だったことにしちゃえ
どーんなーピンチの時もー絶対あきらーめーなーいーそんぁ
そしてカエルたちの歌う亜美をたたえる歌がこだまするのであった…
ドッドッドッドッドッ
どこにカエルがいるんだどこに!!

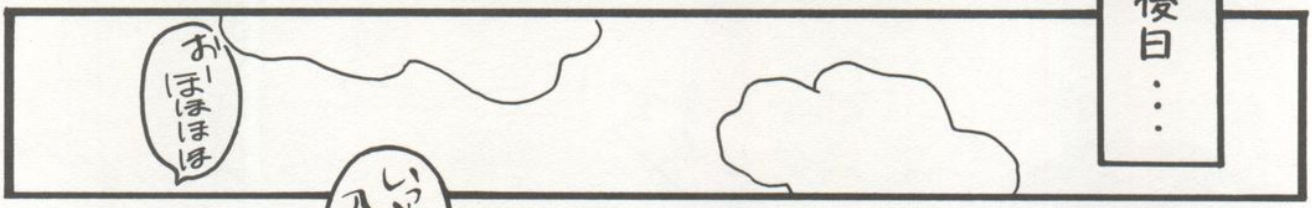
長いナイフの月の夜
バン。
トボボ
もう面倒みきれません。
明日の追試。
ラストチャンスと思ってください。
えんでダメなら
もー度中2。
まずいわー。マジで

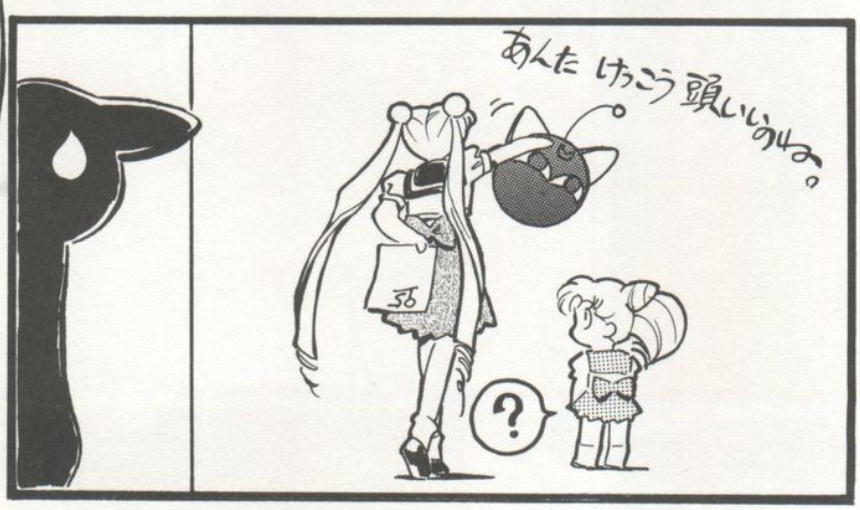
ルちゃはあすかったな。
ぬずみ小説


すぴー


ルナちゃん。お願いがあるんだけど。
ブト
明日はわたしに化けて影武者として学校に行きなさい。


さもないと耳をじっちゃうわよ。

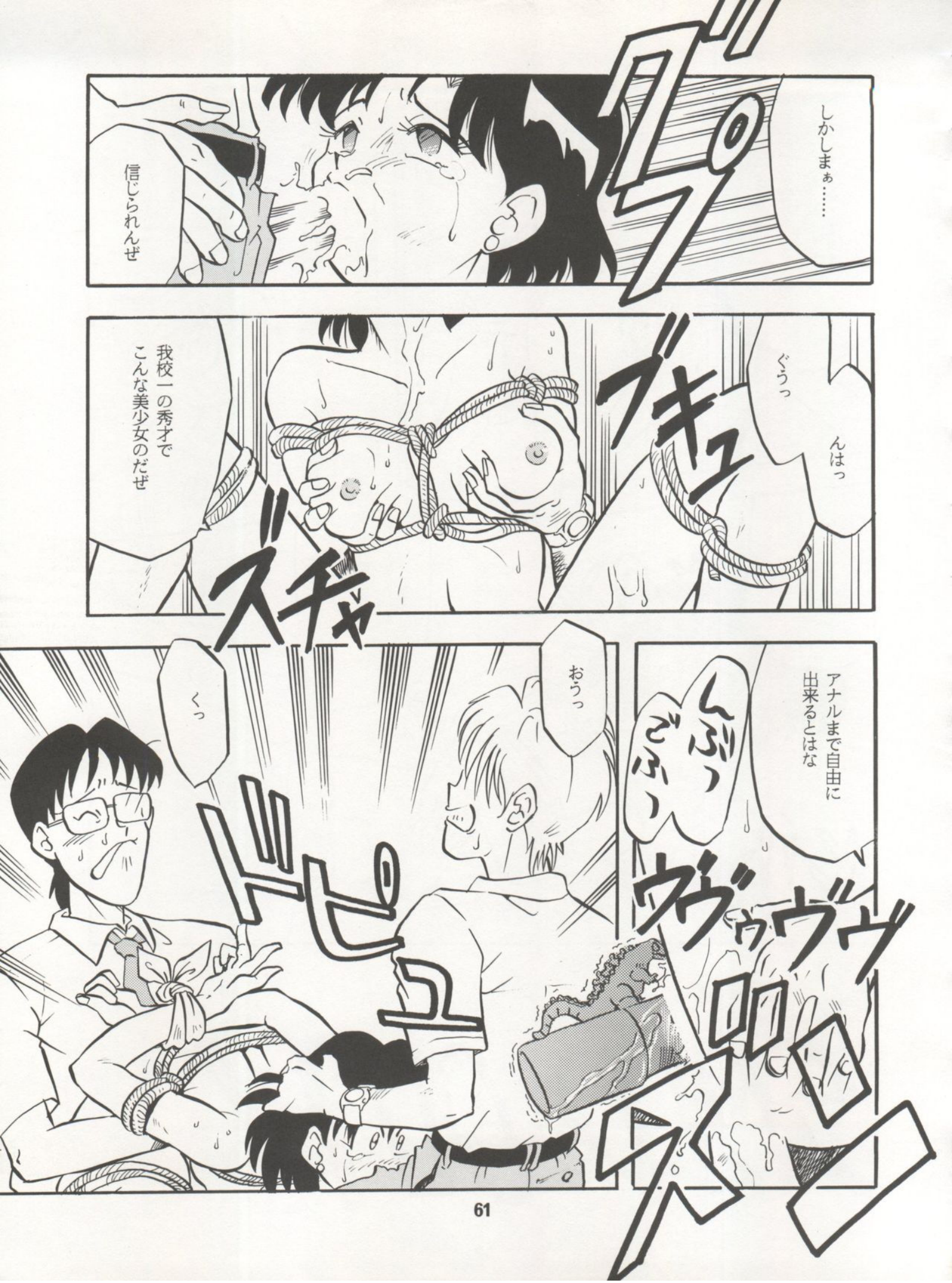

後日・・・
おーほほほほ


あんたけっこう頭いいのね。
?

いっそ入れ替えたちが・・・

うさぎ粛清の危機か？

SCRAPS
どし
どし
ずるりん


しかしまぁ……
信じられんぜ
ブギュ
んはっ
ぐうっ
我校一の秀才で
こんな美少女のだぜ
ズチャ
アナルまで自由に
出来るとはな
ふぅ
ごふぅ
ウヴゥウヴゥ
おうっ
くっ
ドピュ

どうですか満足して頂けましたか？

ああ

本当に今ほどお前の家庭教師していて良かったと思った事はなかったよ　ははは

じゃあこれで例の計画にも参加してくれますね

もちろん

何でもやらせてもらうよ

ヒクッ

ヒクッ

SOLD OUT!

何かしら…
亜美ちゃんがこんな所へ
呼び出すなんて

あっ

お待たせー

ええっ！

ほ、本当に？

ええ…

こ、困るわ私
だ、だって

初めてなんだよ
好きだなんて男の方から
言ってくるのは

……

じゃあ亜美ちゃんの…

ええ

以前家庭教師をしてもらった事があるの

それで亜美ちゃんが教育実習の先生から頼まれたのね

後は本人に聞いてね

あ…

今まで私ったら…人を好きになるのは得意だったけどさぁ

ドキドキドキドキ

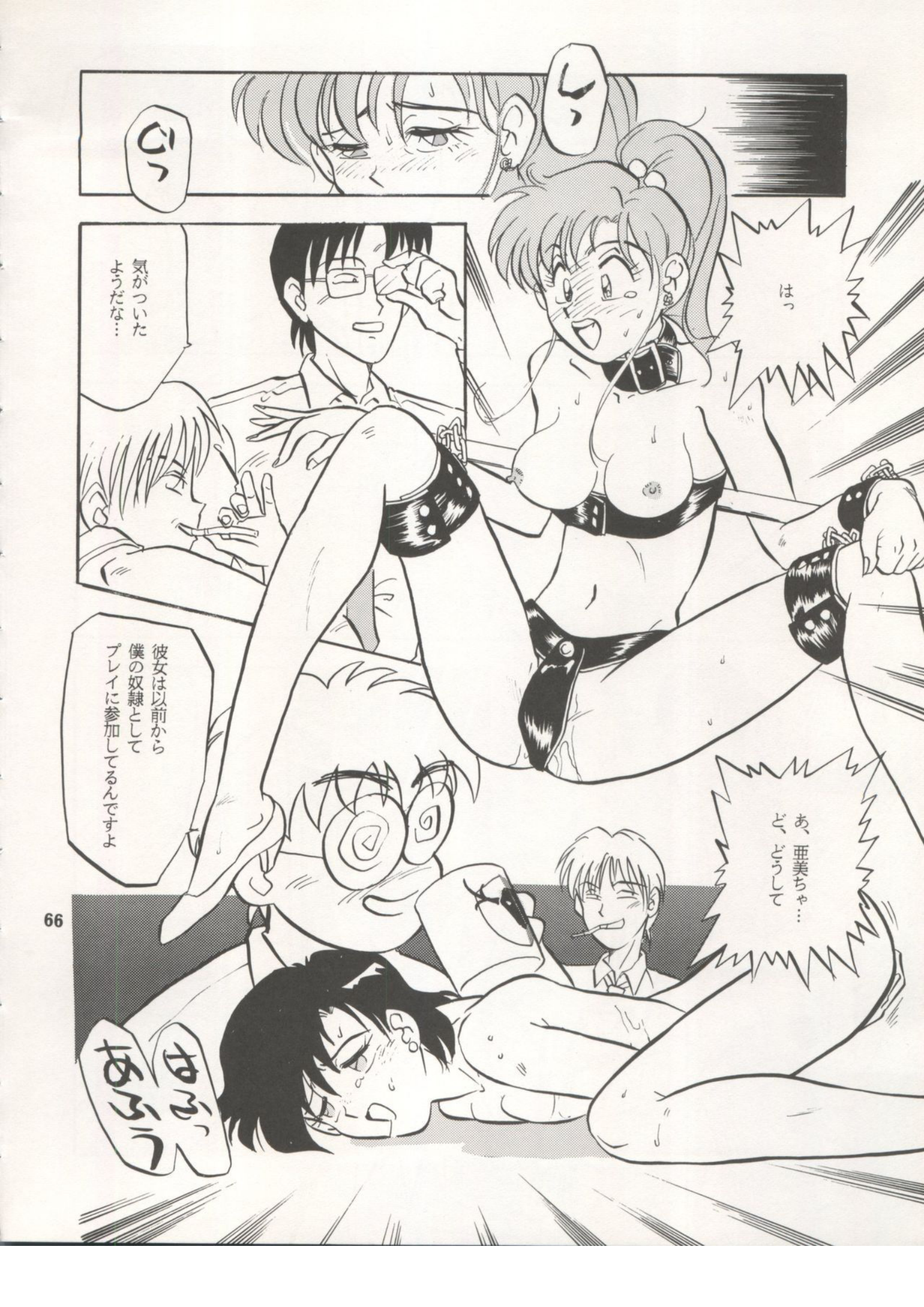
どうしよう…

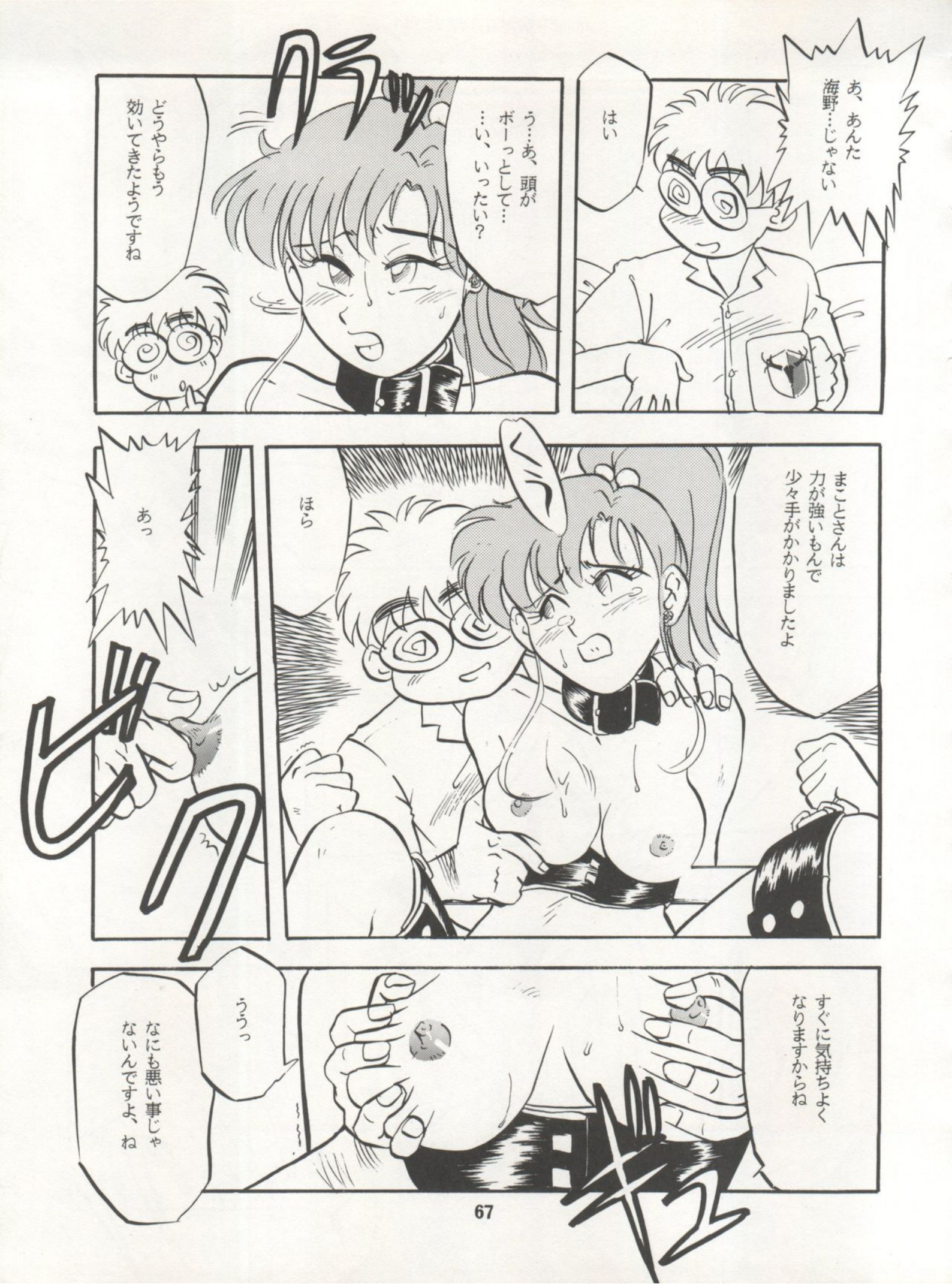
ジジ

今度は向こうから好きになってくれたんだ

バキ

木野…さん？
あ、…ああ
教生の轟です
あの話は…
ガサッ
ええ…亜美ちゃ、い、いや
水野さんから聞いて
あの、その
それで
どうだろう
どうって
言われても
？
ひっ
ぎゃっ
うううう


じっ
じっ
はっ
気がついたようだな…
彼女は以前から僕の奴隷としてプレイに参加してるんですよ
あ、亜美ちゃ…ど、どうして
はるっ
あふう


あ、あんた海野…じゃない
はい
う…あ、頭がボーっとして…
…い、いったい？
どうやらもう効いてきたようですね
まことさんは力が強いもんで少々手がかかりましたよ
ほら
あっ
すぐに気持ちよくなりますからね
ううっ
なにも悪い事じゃないんですよ、ね

んはぁ ひぅ
よく学び よく遊ぶ
さすがに水野さんは 率先してるようですね
ブチュ
ズッ
ひゃああっ
おや、ずいぶんと 敏感なようですが…
ひっ
パチ
トロ

なんだ…
こっちはすっかり
準備できてますね
そ、そんな
ああっ、お願い
もっと、もっと
抉ってぇ
本当にお前は
好きだなぁ
そら
力を抜きな
ポッ
ズポ
うわぁぁ
すごいなあの娘
しかし君にだって
プレゼントはあるよ
なあに、あとでじっくり
お相手しますけどね
ブーン
あひっ
いいいっ
ズッ
ビュ
ブッ

ひっ
ズリュ
ああああっ
……あ熱いぃ
ヴヴヴヴ
うわぁあああ
そうら今度は
俺のをやるぜ
よし、じゃあ
向きを変えよう
よっ
くっ
いひいいぃ
ズボッ

さあ、お待ちかね
おんんん
おう！こりゃすげぇぜ
ビクッ
ビクッ
ぼっ
どうです？まこちゃん三人に愛されて…亜美ちゃん嬉しそうでしょう
……
グポッ
ドプッ
グプッ
ニヂッ
はううっ
ビクッ
ブウウウン
やはり愛すより愛されなきゃ

そろそろ向こうも出来上がってきたんじゃないのか？

まだまだ

ヒイイッ

じらさなくちゃそうだったよなぁ

はい

自分から欲しがるまで

それがまあ調教の基本ってか

ははははは

ううっ
ドピュ
ところで…
最初はだれが
そうだな…
じゃんけんはどうだ
そうだ！
この娘にさせちゃあ
おう
うおっ
ぐううっ
ドピュ
悪かない
考えじゃないか
ドピュ

よーし…
いい娘だ…

ずっ

一滴残らず
吸い出して飲め
早くしな

うぁ

そうそう

ブフッ

棒だけはじゃまだ
外してやるか

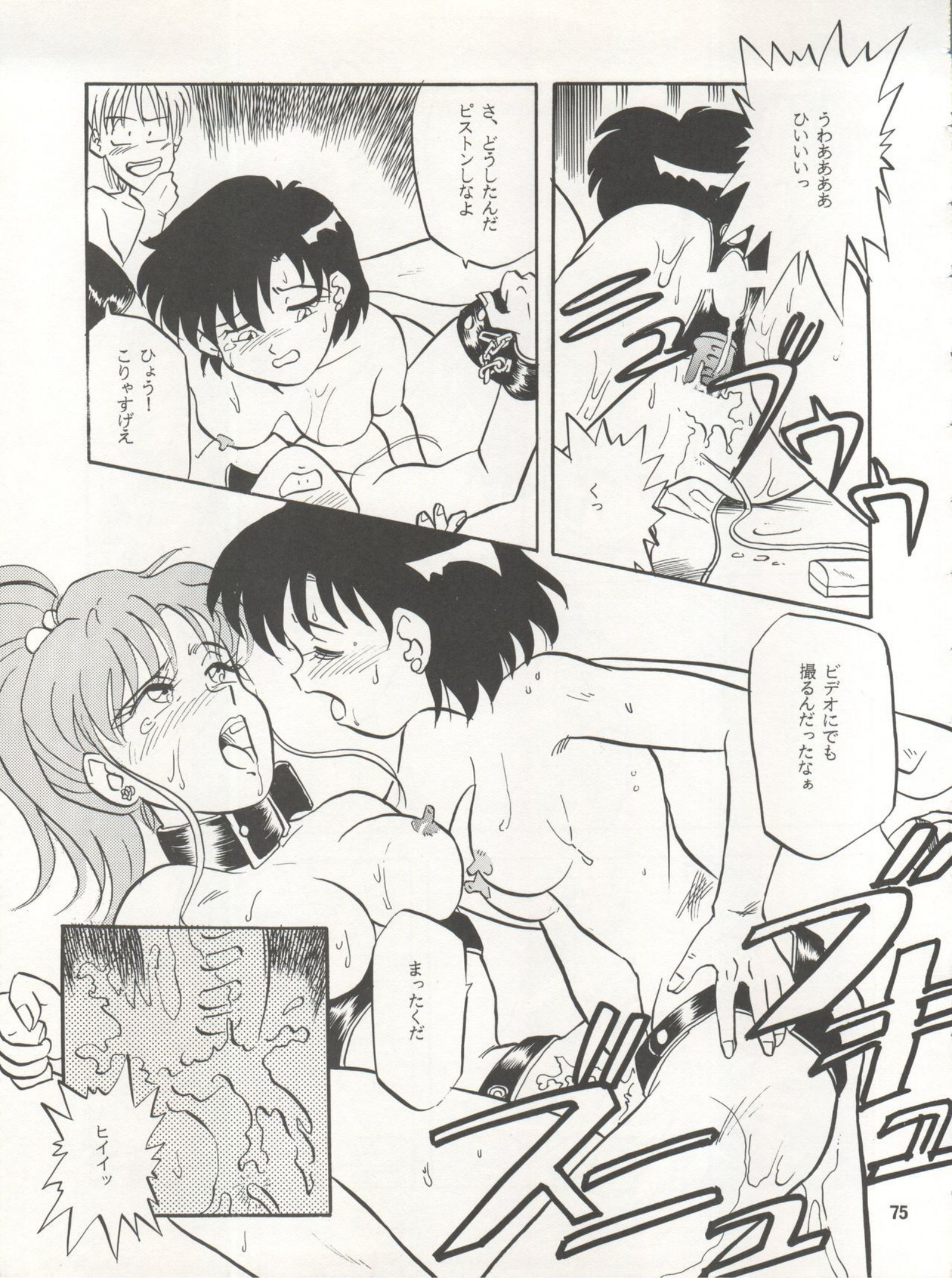
準備できた
ようだな

さあ、遠慮するなよ
埋めてやりな、ほら

ああああああ

ズッ

ま、まこちゃん


うわあああああ
ひいいいっ
くっ
さ、どうしたんだ
ピストンしなよ
ひょう！
こりゃすげえ
ビデオにでも
撮るんだったなぁ
まったくだ
ヒイイッ

さあて…
手伝ってやるか
ぐっ
向きをかえるぞ
いいな！
へへへへへ
物足りないらしい
こいつをやろう
ひぐっ！
ズッ
？
そうらこいつだ
歯をたてるなよ！
おう
そうそう
上手いもんだ
いいか…喉まで
突っ込むからな
じゅぶぶ

どうれ
こっちの方はと

どうやらもう
充分のようだな

楽にして
力を抜いてろよ
すぐに天国に
連れていってやる

ビグッ

ぬぬ

ぬリュ

ぐっ

ギュブッ

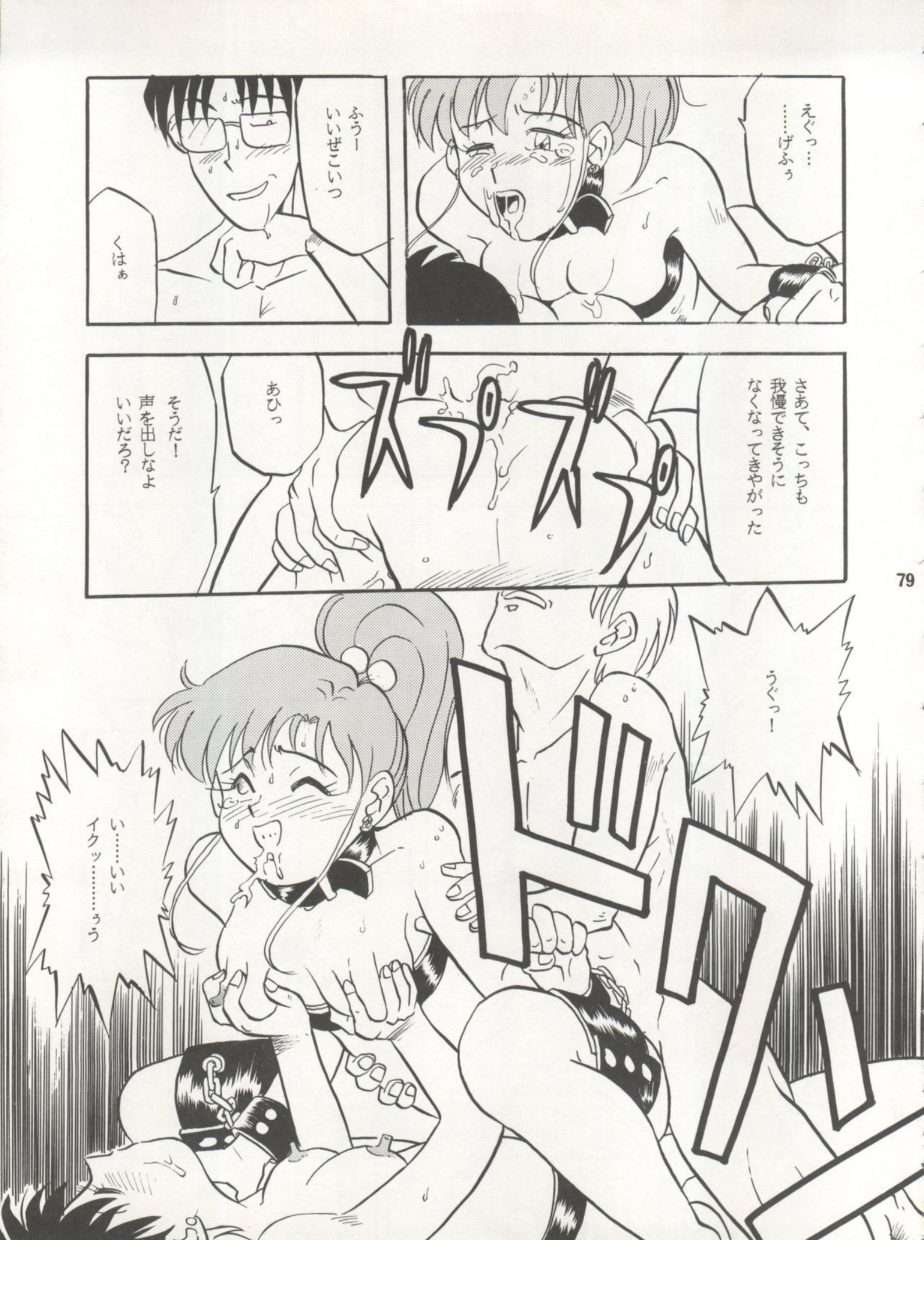
ミュブッ

よーし入った
っくぅ…すげぇ

おう！

ミュブッ

おうおう！
そりゃっ
そりゃっ
ズプッ
ドプッ
ぶぶぶ
うおっ！
出すぞっ
今だ！ 飲め！
息をせずに
一気にな
ごくごく
ドクドク


えぐっ…
……げふぅ
ふうー
いいぜこいつ
くはぁ
さあて、こっちも
我慢できそうに
なくなってきやがった
ズプズプ
あひっ
そうだ！
声を出しなよ
いいだろ？
うぐっ！
ドクン
い……いい
イクッ……ぅう

どうです？
素晴らしかったでしょ
……
カチャ
さあ、僕の番ですね
うう！
すげえな…
もうここまでとは
拾い物だったな
さあ、お前はこいつを
奇麗にしな！
あうっ……も、もっと
もっと来てぇ……

どうです、まことさん
僕らの仲間に
なりませんか？

あうっ

ギュ

なっ……
なりますぅ

ひっ

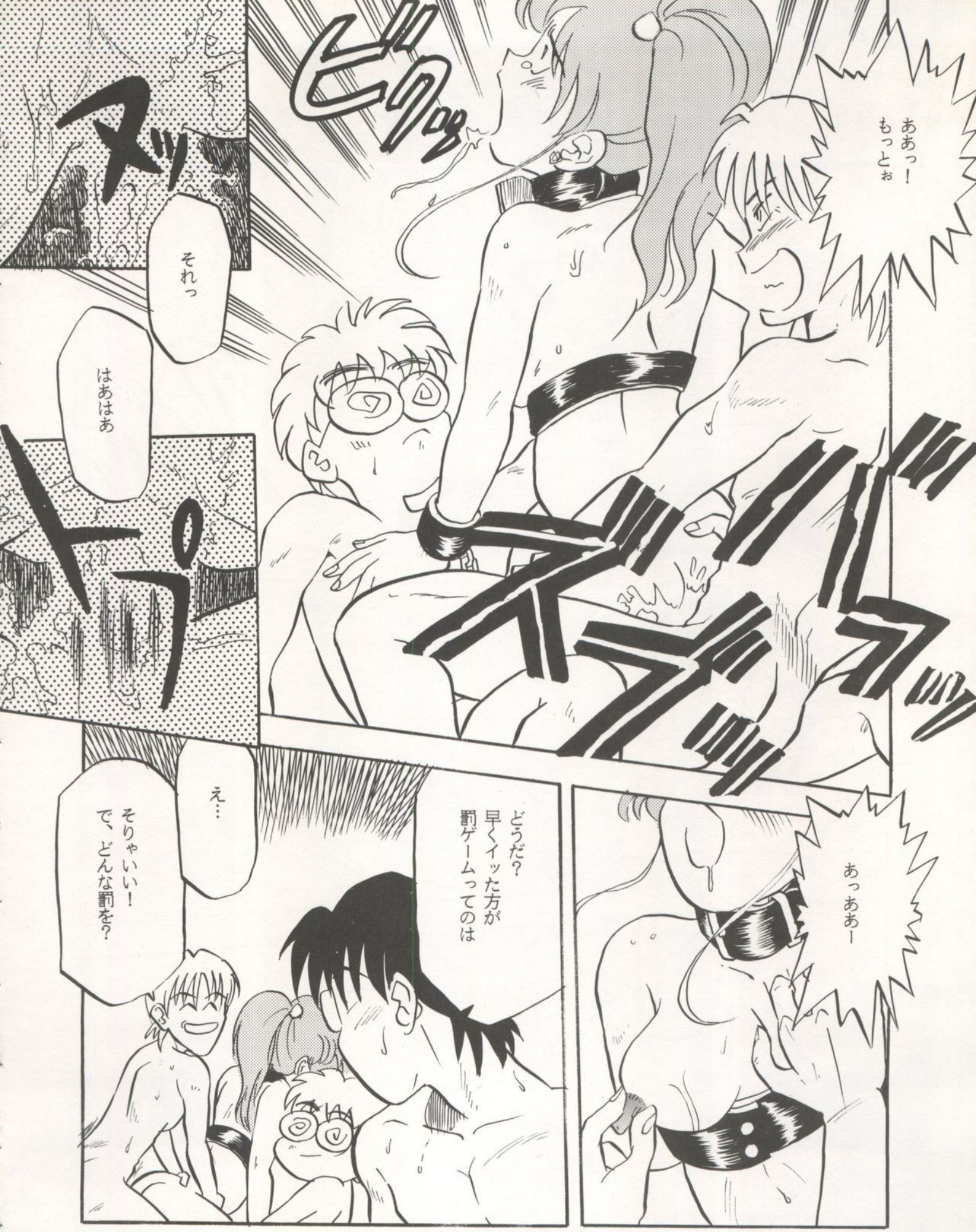
よし、お前には
俺がこいつをくれてやる

ほお

じゃあ一つ今度は
きみのこっちを
味あわせてもらおう

ああっ

さあ、どうぞ


ああっ！もっとぉ
ビクッ
それっ
はあはあ
あっああー
どうだ？早くイッた方が罰ゲームってのは
え…
そりゃいい！で、どんな罰を？

あ、明日一日バイブをいれっぱなしなんてのは

いいね

やりましょう

ひいいいっ

ズッ

ズッ

あひっ

あう

ア☆プ☆プ

むっ

ああーっ！

どっちが先にいったっけ？

同時だったな

ハハハ

ね、ね、最近さぁ
あの二人仲良すぎない
そうよね
何か変じゃない
そうですかねえ
あ
今日は言われた通り
してきたか？
はい…
よし…じゃあ
放課後いつもの
場所でな！
ドキ
ドキ
ドキ
to be……

$$\therefore \quad \frac{f(b)-f(a)}{b-a} < f'(b) = -(b+1)e^{-b}$$

$$h(x) = f(x) - f(a) - (x-a)f'(a)$$

では

$$h'(x) = f'(x) - f'(a) > 0 \quad かつ \quad h(a) = 0$$

$$h(b) > 0$$

$$f(b) - f(a) > (b-a)f'(a)$$

$$\therefore \quad (a+1)e^{-b} = f'(a) < \frac{f(b)-f(a)}{b-a}$$

定理より $\dfrac{f(b)-f(a)}{b-a} = f'(c)$ をみたす c $(a<c<b)$ が存在する。すな

$$\frac{(b+2)e^{-b}-(a+2)e^{-a}}{b-a} = f'(c)$$

$'(x)$ は単調に増加するから，$a<c<b$ で

$$f'(a) < f'(c) < f'(b)$$

，$f'(x) = -(x+1)e^{-x}$ より

$$(a+1)e^{-a} < \frac{(b+2)e^{-b}-(a+2)e^{-a}}{b-a} < -(b+1)e^{-b}$$

り

$-e^{-x}) = -(x+1)e^{-x}$

$)(-e^{-x}) = xe^{-x} > 0 \quad (x>0)$

する。

$f(a))$，$B(b,\ f(b))$ を結ぶ

$a+2)e^{-a}$

$-f(x) - (b-x)f'(b)$

$f'(b) > 0$ （∵ (1)より）

that is, musical engagement—on the 6th Novem
musicians of the seventies were very young, and
it was in a tough, aggressive style.

Punk musicians did not want to appear clean,
just the opposite! They (2) that pop music in
a sell-out; in other words, they thought that ki
sugary disco music by pop stars who were primari
ing millionaires. Punks sang angry songs with an
(4) schools, government—in fact, the whole of
chists. At first punk musicians were (5) b
came clear that punk music was a hit with
sic was being played everywhere.
t punk musicians did not set out to cre
(6) up with the conventional pop look
into their heads. One of the Sex Pistols, for
suit, shirt and tie and then took them home a
At the next Sex Pistols concert he wore t
punk fans consciously (8) their
ore pins and did their hair in colour

最近 こういう
ひざをついたポーズ
してくれませんね。

どうも「R」になってから
ムーン以外の4戦士
が適当に扱われて
いる様な気がする…

土佐日記.

あとがきにかえて

無事発行出来てるだろうかねこの本は。まあ大丈夫だろう。あ、どうもどうもどうもどもどもTです。いかがでしたか？気に入って頂けましたか？今回はいつものメンバーに加えＢＩＧ　ＧＵＥＳＴＳをお迎えしてのセーラームーン第三弾夏の号でした。お忙しい所、参加してくださったＤｒＭＯＲＯ氏及び鶴巻和哉氏には特に感謝の意を表したい。大変ありがとうございました。

さて、同人誌好きの方ならもうご存じと思うが、即売会で頒布された同人誌が一般書店で販売されているのだ。海賊版だ。かなり広範囲に流れているらしく私のいる田舎でも発見した。奥付住所・あと書きなどもそのままに複製し、表紙に成人向けマークを入れ透明の袋で包んだだけの悪質なものだ。おまけにオリジナルだろうがアニパロだろうがおかまいなしのようなので始末に悪い。中にはHが無いのまで成人向けとして売ってるらしい。なんだこりゃ。

どちらにせよ同人誌とはいえ著作権があるはずなので笑い事ではない。奥付住所までそのままでは不要のトラブルにも巻き込まれかねない。何とかしたいが悪意の第三者が存在する以上、海賊版の発生は防ぐことが困難だ。ということで今回は奥付住所等は削除させて頂く事とした、心ある人は知っているはずだから問題無いと思う。御了承迄。

話を戻そう。セーラームーンＲつまらんな。話がダメだからだ。キャラクター達が泣いてるぜ。Ｒになる前もつまらん話が多かったがそれは各話の枝部分がつまらんだけで、物語の骨子はしっかりと面白かったぞ。Ｒで下手なストーリーを無理矢理付け足すくらいなら、話など考えずキャラを生かす事だけ考えてりゃいいんだ。わかってると思うが、うさぎと衛がくっついたらあの話は終わりなのだ。わかってるからこそ無理やり二人を引き離したんだろうけど。御都合主義で引き離された二人を見ても先の展開にワクワクしたりしない、ただ痛々しいだけだ。こういうのは本当に見たくない。
レイと衛の事もすっかり忘れてるし、困っちゃうぜ。
ＳＤの幾原氏、頼みますよ。今後に期待してずっと見るからね。

ルナティック　アサイラム　ダイナミックサマー　バージョン
１９９３年　８月吉日
発行元　　隆起社

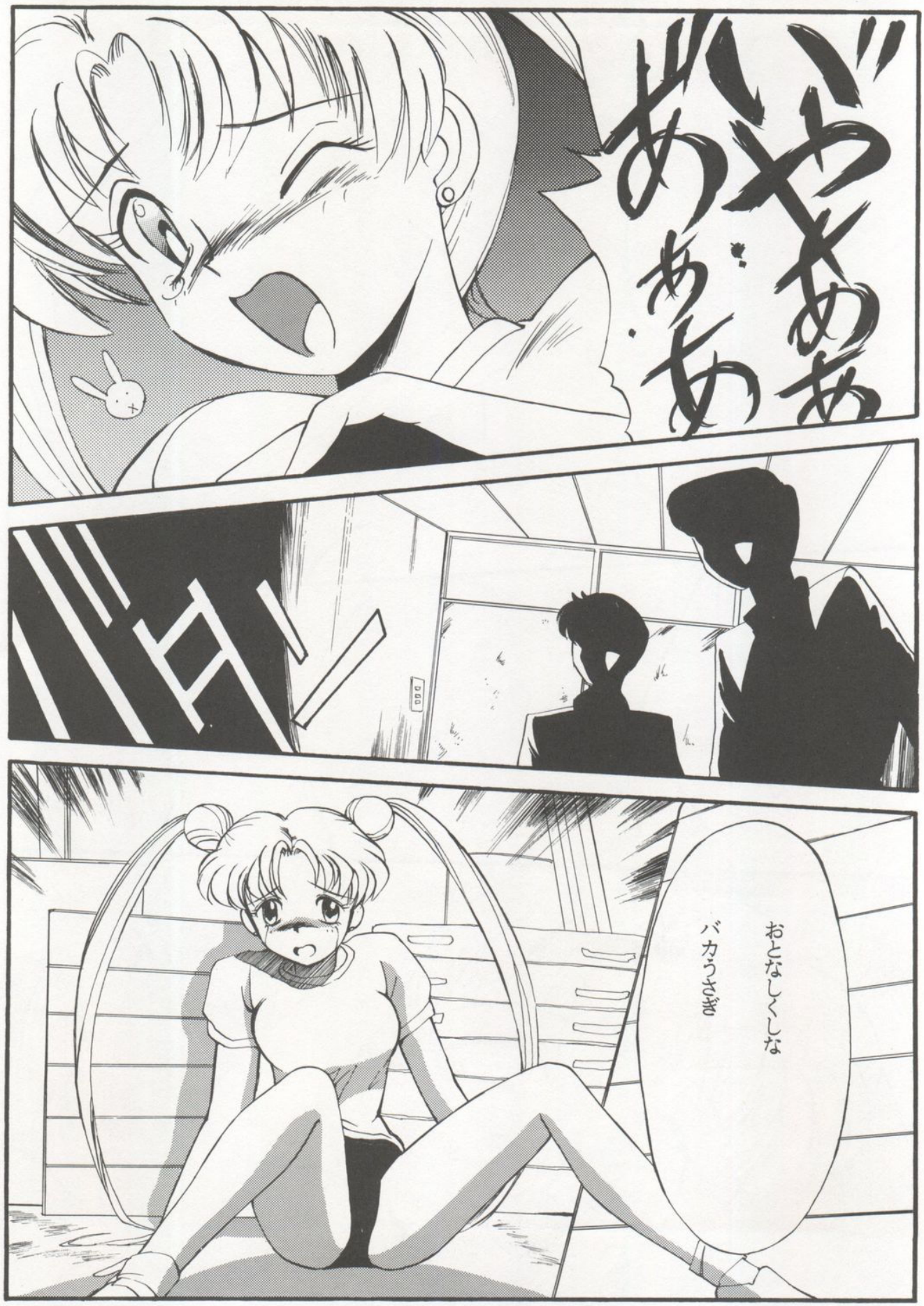
読者の皆様へ
この本は同人誌であり、各種即売会において同好の志にのみ頒布されております。漫画専門店にも頒布委託は行っておりません。万が一書店で当誌を入手された場合、それは悪意の第三者による海賊版であり、当方とは全く関係なく責任等負いかねますので御了承願います。

実写の恐怖

大山アロザちゃん3

みごとにMAKE UP(でっちあげ)された
ミュージカル版SM,
その11カイダー並の肩が印象的
肩パットのコブコブがこわい.... でもミュージカル見たいっス

成人向


いやあああ
おとなしくしな
バカうさぎ